講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書2

名分湯戸遺跡群

１９８６年３月

島根県鹿島町教育委員会

講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書2

名分湯戸遺跡群

巻頭図版

小勝間山絵図（鹿島町大字名分 井上進氏蔵）

佐陀大社ノ末社　勝間ノ社ノ神木也　常世ノ長鳴鳥ヲ祭ル故ニ或ハ呼テ雞塚ト云

勝間山周廻百有三歩東西二十六歩南北四十三歩　松樹高サ七丈　枝東西十丈二尺南北十一丈一尺　幹ノ圍一丈七尺　両岐ノ所ニ至テハ圍二丈一尺八寸　南出ノ枝圍六尺五寸　長サ六丈一尺一寸　偃テ土ニ附事一丈七尺　復土ヲ離レテ進ム事一丈八尺　北出ノ枝圍七尺　西出ノ枝圍六尺　凡ソ枝ノ偃テ土ニ附ク者　大小十三

俗呼テ下リ松ト称ス

人丸

鳥の音のいつも絶さぬ勝間山の
万つ者常世能志るし那らまし

冷泉大納言□□郷

枝堂禮てね者ふめくりの蔭飛路三
いくよ可こゝに小可つ万乃万都

折句尓　入江民部少輔相尚郷

か者らしよ徒多へて幾世万つ乃葉濃
やをの神　以満万毛流越美津

芝山中納言持豊郷

神濃木と阿ふく裳多可し出雲奈る
か川まの松能世耳二な支加斗

序

鹿島町は古い歴史をもった町であります。ご存じのように合併の際につけられた「鹿島」という名前も、古く風土記時代の秋鹿郡、島根郡にちなんでおります。それを裏付けるように史跡佐太講武貝塚、古浦砂丘遺跡、銅剣・銅鐸を出土した志谷奥遺跡、大規模な古墳群であることが判明した奥才古墳群など著名な遺跡が数多く知られております。

このたびは、講武地区県営圃場整備事業にともない、昨年度の名分塚田遺跡につづいて、今年度は名分湯戸遺跡群について発掘調査を実施いたしました。限られた範囲での調査ではありましたが、名分藤山古墳の発見など、一定の成果をあげえたように考えます。ひきつづいて圃場整備事業は行われますが、こういった文化財の保護行政にもご理解をいただきながら、美しく住みよい郷土とするために流された先人の汗に思いをいたすことで私達の明日を考えてゆきたいものと思います。

終わりになりましたが、調査にあたってご協力、ご指導をいただいた土地所有者の方々、近隣の皆さん、松江農林事務所、島根県教育委員会などの各位、各機関にあつく御礼申し上げて、報告書発刊のごあいさつとさせていただきます。

昭和61年３月

鹿島町教育委員会

教育長　加　納　益　雄

例　　言

1．本書は、鹿島町教育委員会が松江農林事務所の委託を受けて実施した講武地区県営圃場整備事業に伴う名分湯戸遺跡群の発掘調査の記録である。

2．名分湯戸（みょうぶんゆど）遺跡群の調査は、以下の調査区を設定して実施した。

後釜（うしろがま）調査区（島根県八束郡鹿島町大字名分388－5、397、398）

小勝間（こがつま）調査区（島根県八束郡鹿島町大字名分484）

藤山（ふじやま）調査区（島根県八束郡鹿島町大字名分570、571、572）

3．調査は、昭和61年２月17日から３月19日まで延べ24日間を費して実施した。調査体制は以下の通りである。

事務局　井ノ口隆義（鹿島町教育委員会教育次長）

曽田　稔　（　　同　　社会教育主事）

調査員　赤沢秀則　（　　同　　主事補）

調査補助員　大智　浩、近藤哲雄、手銭弘明

調査指導　松本岩雄（島根県教育庁文化課主事）

作業員　小笹　貢、加藤幸吉、立石忠夫、石橋静枝、石橋シナ子、袖本広江

遺物整理員　大智　浩、近藤哲雄、丹羽野輝子

4．調査にあたっては、土地所有者井上繁己、稲田輝郎、井上正雄、井上幹穂、青山　巖、青山　豊の各氏に多大な協力を得た。また、松江農林事務所耕地第一課、カナツ技建工業株式会社、鹿島測量設計有限会社の方々にも協力いただいた。あわせて感謝の意を表したい。

6．本書に用いた方位は、国土調査法による第Ⅲ座標系Ｘ軸の方向を示す。したがって磁北より7°12′、真北より0°32′の方向を示している。また、実測図中の高度値は海抜高である。

7．本書の編集、執筆は、曽田、赤沢が担当した。

目　　次

序
Ⅰ　調査の経過……1
Ⅱ　位置と歴史的環境……2
Ⅲ　調査の概要……4
　１．後釜調査区……5
　２．小勝間調査区……10
　３．藤山調査区……14
Ⅳ　小　　結……26

挿図目次

図１　鹿島町位置図……1
図２　名分湯戸遺跡群と周辺の遺跡……3
図３　後釜・小勝間両調査区配置図……5
図４　後釜調査区土層図……6
図５　後釜調査区出土遺物実測図……8
図６　後釜調査区土層模式図……9
図７　小勝間調査区測量図……11
図８　小勝間調査区平・断面図……12
図９　土坑１・２実測図……13
図10　土坑３実測図……13
図11　小勝間第１調査区出土遺物実測図……13
図12　藤山調査区配置図……14
図13　藤山古墳測量図……15
図14　藤山古墳墳丘断面図……16
図15　藤山調査区内遺構配置図……17・18
図16　藤山調査区土層図……17・18
図17　溝１実測図……20
図18　土坑１・２・３、溝２実測図……21
図19　土坑２出土遺物実測図……22
図20　溝３・土坑５実測図……23
図21　土坑５出土遺物実測図……23
図22　掘立柱建物実測図……24
図23　掘立柱建物出土遺物実測図……24
図24　遺構新旧関係模式図……25
図25　町域内古墳墳丘規模比較図……28

Ⅰ．調 査 の 経 過

昭和58年８月から始まった講武地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについては、関係者の度重なる協議を経て、昭和59年度中に名分塚田遺跡の第１次発掘調査を実施した。(1)

この調査結果と県教育委員会文化課の指導をもとに松江農林事務所、町農林課と協議を重ねたが、昭和60年９月21日の協議で、

- 県営圃場整備事業第３工区にかかる名分塚田遺跡については、61年度中に第２次調査を実施する（町費負担、一部事業費対応)。
- 同第４工区にかかる名分湯戸遺跡群については、昭和60年度中に発掘調査を事業費対応で実施する。

こととなった。

これを受けて、松江農林事務所から発掘調査の依頼があり（10月14日付）、松江農林事務所と鹿島町は、10月31日付で委託契約を締結した。

発掘調査は、町教育委員会の都合で年明けを待ち、松江農林事務所からは昭和61年１月10日付埋蔵文化財発掘通知書を、町教委からは１月６日付遺跡発見通知書及び、１月11日付埋蔵文化財発掘調査通知書をそれぞれ提出して実施するところとなった。

実際の発掘調査は、２月17日から３月19日までの実働24日をかけて実施した。現在、この調査結果をもとに取扱いについては協議が進行中である。

また、昭和61年度は、前記の名分塚田遺跡第２次調査および、文化庁の国庫補助を得て、第１工区にかかる遺跡の詳細分布調査を実施する予定である。

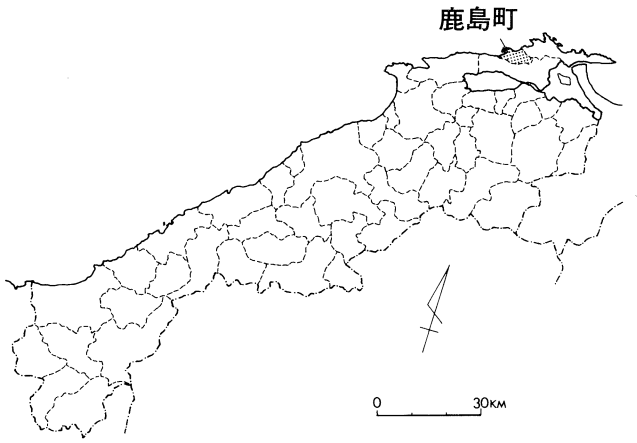


図１　鹿島町位置図

Ⅱ．位置と歴史的環境

島根半島のほぼ中ほどの谷あいに位置する講武平野は、面積約140 *ha*の水田を有し、半島部でも持田・川津平野とならんでかなり広い平野である。この平野は、谷奥から流れ出す講武川によって形成された沖積平野で古くから水稲耕作地として格好の条件を備えていたものと考えられる。

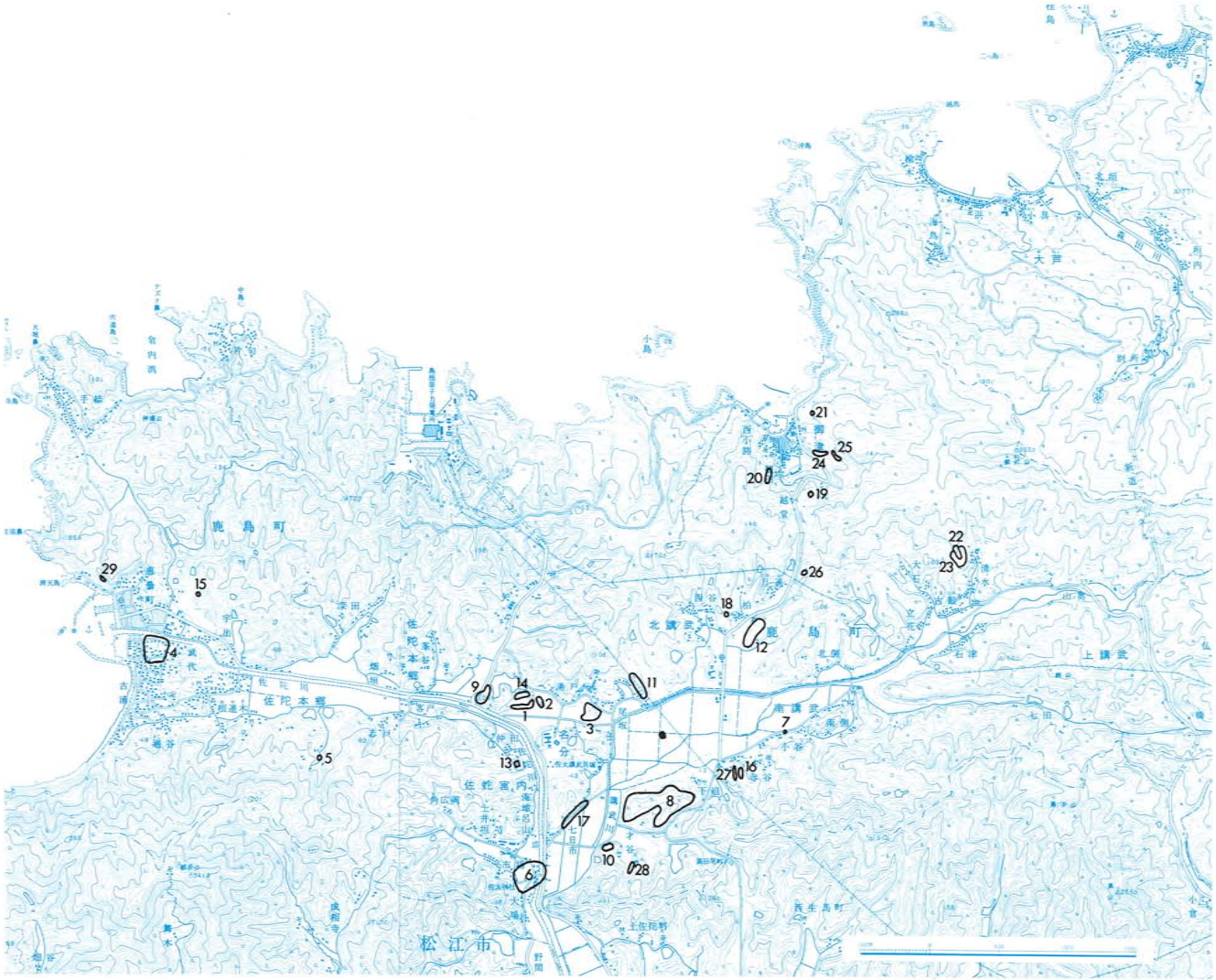
名分湯戸遺跡群は、この講武平野の西端に位置し、周辺には縄文時代早期末～中期の史跡佐太講武貝塚[2]が知られており、これは現在の佐陀川沿いに存在した潟湖（『出雲国風土記』にいうところの「佐陀水海（さだのみずうみ）」、「恵曇陂（えとものつつみ）」の前身）をそれぞれ南と西にひかえた位置にあり、こうした潟湖から汽水産のヤマトシジミなどの魚介類を採集し、周辺の山野に鳥獣、堅果類を求めていたものと考えられる。

周辺部における弥生時代の開始は、古浦砂丘遺跡[3]の成立に求められると考えられる。この遺跡は、砂丘の後背地にあたり、さらに沖積をすすめた前述の「恵曇陂」の周辺部を湿田として開発する集落も包蔵しているものと考えられる。

次いで、佐太前遺跡[4]が前期後半に成立する。この遺跡は、大規模な集落址と考えられ、その存続期間も長い。この集落を母集落として講武平野の開発が行われたものと考えられる。さらにこの時代には「恵曇陂」の南岸、山ふところに銅鐸２、銅剣６を埋納した志谷奥遺跡[5]があり、また講武平野の南縁では、四隅突出形墳丘墓と考えられる南講武小廻（こざこ）遺跡[6]が、後の数多い古墳群に先行して築かれている。

古墳時代には講武平野をめぐる丘陵上に数多くの古墳群が築造されたことが知られている。特に名分地域には、奥才古墳群[7]、鵜灘山古墳群[8]、名分丸山古墳群[9]など、前半期にさかのぼる群集墳が知られており、古墳・群ともに規模の大きいものが多いようである。これらの古墳群は、講武平野内に成立した集落群による開発がかなり進み、その指導的役割を果たした人々を古墳を築いて葬りうるまで生産力の向上があったことを示すものであろう。古墳時代後期には、講武平野の中心部分である北講武地区に横穴式石室を内部主体としていたと伝えられる３古墳が知られている（荒神古墳[10]、向山古墳[11]、岩屋古墳[12]）。これらの石室をもつ古墳の他に、町内ほぼ全域にわたって多数の横穴墓が分布している。これらの横穴は、現在の大字の殆どで発見されており、この時期には現在の集落の原形がすでにできあがっていたものと考えられる。

古墳時代以降、８世紀代に著された『出雲国風土記』では、講武平野は島根郡の余戸里と生馬郷とに分れていたようである。



1．後釜調査区
2．小勝間調査区
3．藤山調査区
（1～3名分湯戸遺跡群）
4．古浦砂丘遺跡
5．志谷奥遺跡
6．佐太前遺跡
7．南講武小廻遺跡
8．奥才古墳群
9．名分丸山古墳群
10．小川古墳群
11．尾坂古墳群
12．向山古墳群
13．面目古墳
14．かまの古墳群
15．狐堀古墳
16．中尾谷山古墳群
17．名分塚田遺跡
18．岩屋古墳
19．的松古墳
20．秋葉山古墳群
21．御津中の津古墳
22．寺の奥古墳群
23．寺の奥横穴群
24．茶畑横穴群
25．御津貝塚横穴群
26．恵谷横穴群
27．清水奥横穴群
28．嵐廻横穴群
29．寺尾横穴群

図2　名分湯戸遺跡群と周辺の遺跡（1/50,000）

Ⅲ. 調 査 の 概 要

名分湯戸遺跡群は、講武平野から西に分れた小盆地の周辺に所在する。周辺は海抜６ｍから2.5ｍに至る水田が西に向かって傾斜しながら存在している。この盆地内３ヶ所でそれぞれ調査区を設定して調査を行った。

この盆地の北西に名分丸山古墳群、かまの古墳群の位置する丘陵があるが、この丘陵裾と考えられる部分の水田に２×２ｍの調査区６ヶ所を設定した（後釜調査区）。調査区は西にあるものから順に第１、第２…第６調査区と呼称する。第１～第４調査区では、表土下約0.3～1.0ｍで泥炭状の植物繊維の堆積を検出し、調査前に考えていたような丘陵裾部ではなく、湖沼地の縁辺部であったことが判明した。

小勝間調査区は、この湯戸の盆地内に存在する独立丘陵上に設定した調査区である。この丘陵は南北75m、東西40mの平面楕円形を呈し、水田からの比高12mを測る島状の高まりである。この丘陵の尾根上に幅２ｍのトレンチを５本設定した。トレンチの総延長は32mである。この小勝間山は、その独特な外観で古くから付近の人々に親しまれていたと考えられ、江戸時代の地誌である『雲陽誌』にも記述がみえる。調査区内では土坑３を検出したが、伴う遺物もなく、遺跡と判断するには至らなかった。

藤山調査区は、この盆地の東端を区切るように所在するなだらかな丘陵である。規模は東西140ｍ、南北110ｍを測る。この丘陵のほぼ中央、最高所に台状の高まりがあるが、測量調査の結果、長辺40m、短辺30mの大規模な古墳であることが判明した。この墳頂に設けた10×10mの調査区では、古墳の主体部と考えられる施設は検出されなかったが、後世の溝状遺構や旧表土から掘り込まれる弥生時代の土坑、掘立柱建物の柱穴と考えられる土坑を検出している。また、この丘陵には２～３段にわたってかなり広い平坦面が存在し、古墳以外にも遺構がある可能性がある。

調査は概略以上のような状況で、後釜、小勝間両調査区では明瞭な遺構は検出できず、遺跡と判断することはできなかった。

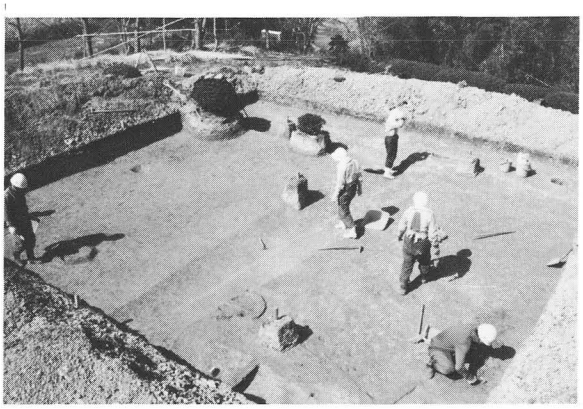


写真１　発掘調査風景

1．後釜調査区

この調査区は、標高約25mのかまの山がなだらかな傾斜をなしてくだり、その末端が水田となっている付近を対象として設定した。丘陵は水田下にもぐっても、その傾斜を変えずに下降するものと考えられ、第１～３調査区で地山を検出できたのは丘陵裾に最も接近する第３調査区のみである。

第１調査区では、地表から約0.3ｍが耕作土、その下に約0.6ｍの灰色粘質土、ごく薄い黒褐色有機粘質土、灰白色粘質土と２枚の間層を挟んで、泥炭状の褐色有機粘質土が堆積している。この層の下限は確認できなかった。この調査区上層から曲物底部が出土した。

第２調査区は、地表から0.45mが耕作土、その下層に茶褐色粘質土、暗灰色粘質土および泥炭状の暗茶褐色有機粘質土が堆積しているが、この層の下限は未確認である。この調査区からは、砥石に使用されたと考えられる擦痕のある石が出土している。

第３調査区は、最も丘陵裾に接近する調査区で、東壁では、丘陵斜面の続きと考えられる地山（橙白色粘質土）が検出され、これに粘質土、複数の泥炭層が堆積する。この調査

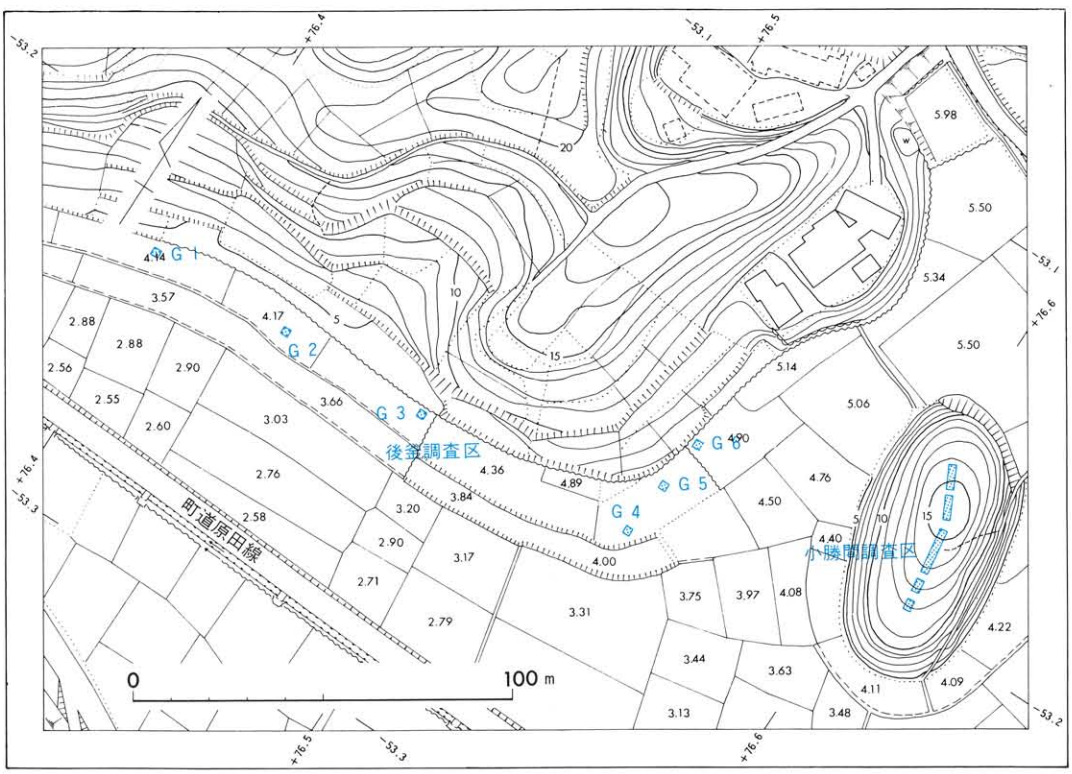
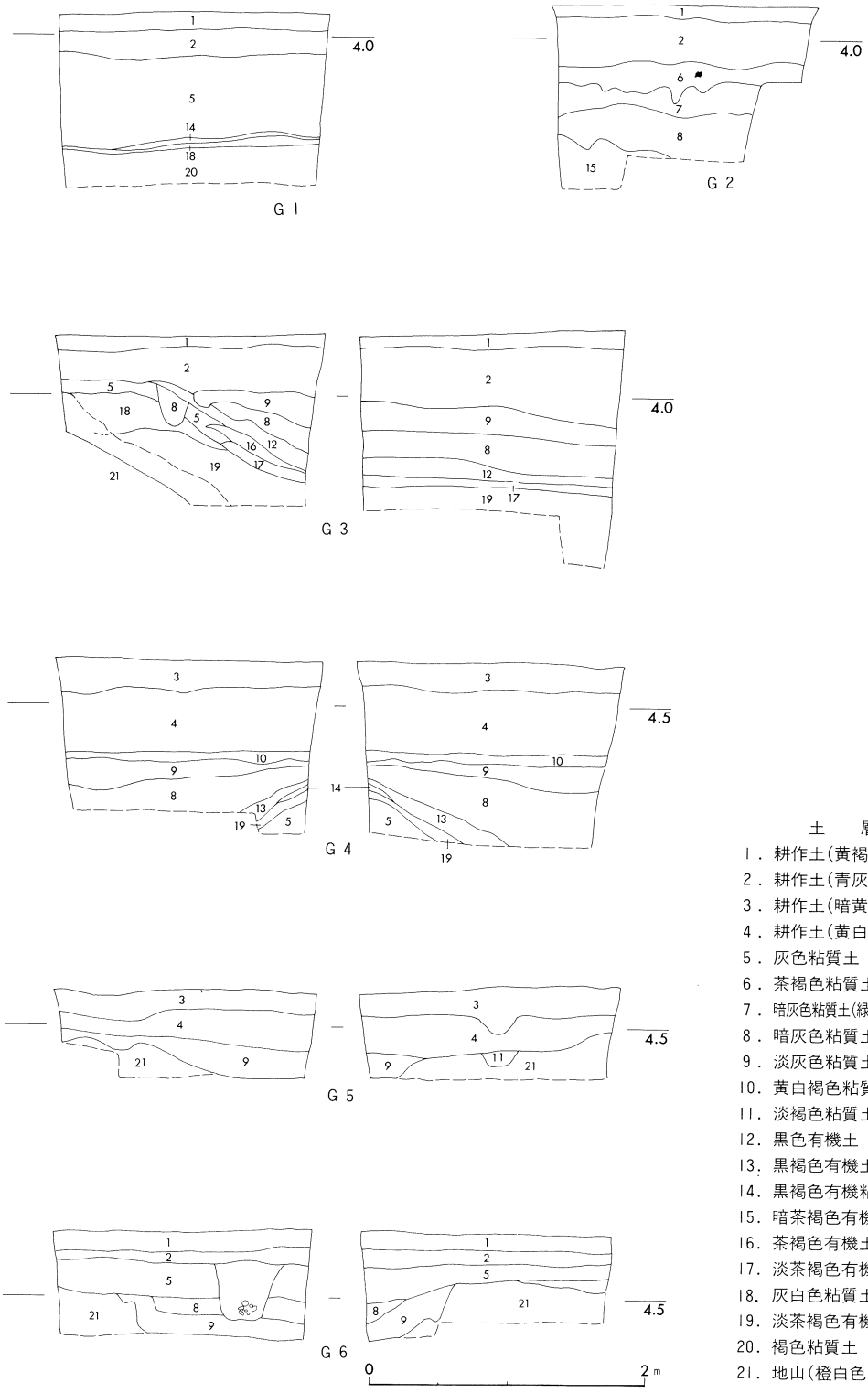


図３　後釜・小勝間両調査区配置図（１／2,000）



土　層

1．耕作土(黄褐色粘質土)
2．耕作土(青灰色粘質土)
3．耕作土(暗黄褐色土)
4．耕作土(黄白褐色土)
5．灰色粘質土
6．茶褐色粘質土
7．暗灰色粘質土(緑色ブロック含む)
8．暗灰色粘質土
9．淡灰色粘質土
10．黄白褐色粘質土
11．淡褐色粘質土
12．黒色有機土
13．黒褐色有機土
14．黒褐色有機粘質土
15．暗茶褐色有機粘質土
16．茶褐色有機土
17．淡茶褐色有機土
18．灰白色粘質土
19．淡茶褐色有機粘質土
20．褐色粘質土
21．地山(橙白色粘質土)

図4　後釜調査区土層図（1/50）

区では泥炭層は特に黒く、厚い。その状態は、地山の傾きと平行するように堆積し、断面は木目状を呈し、長期間にわたって堆積したものと考えられた。また、一部には木片状の繊維も留めていた。一方、南壁ではこれらの層は水平な堆積を示す。

第4調査区は、現在畑地となっているが、これは以前の水田面に客土をして畑としたもののようである。約0.2mの耕作土の下には0.5mの黄白褐色を呈する砂質土があり、これが客土層と考えられ、この下層の薄い黄白色粘質土、淡灰色粘質土が以前の水田耕作土と考えられる。この下に山側から離れるに従い、厚さを増す暗灰色粘質土がある。この下層が第1～3調査区で確認されているのと同様な泥炭層で、傾斜して堆積している。黒褐色を呈するが、層厚は薄い。この下には薄く茶褐色有機粘質土、灰色粘質土がある。この調査区からの出土遺物は認められなかった。

第5調査区は、水田面に設けた調査区で、この部分では土砂の堆積はさほどではなく、地表から約0.4mで橙白色を呈し、砂質の地山に到達する。この付近の水田は、かなりの湿田で、耕作土（暗黄褐色粘質土）は著しく粘性高い。この下層は黄白褐色土で、かなり砂を含み、固い。この下層に一部淡灰色粘質土がゆるやかに堆積している。この調査区からも出土遺物はみていない。

第6調査区も第5調査区とほぼ同様の状況で、地表から約0.4mで地山となっている。耕作土の下面に暗渠が掘り込まれている。暗渠の横断面はU字形を呈し、竹、雑木を敷いて暗渠としている。また、地山面で粘質土の堆積する不定形な落ち込みがあるが、この落ち込みからの出土遺物はない。調査区上層から磨製石斧片が採集されている。

遺　物　第1調査区から出土した木片1は、半円形を呈する板で弧を描く外縁に2本の竹釘をとどめており、曲物の底部と考えられる。この底部は径約16cmに復元でき、厚さは0.6cmを測る。外周は詳細に見ると円は描かず、直線の連続で構成されており、これは側板の屈折に対応すると考えられる。また、各面に部分的ではあるが、鮮やかな青色の顔料が残っている。

2は、第2調査区から出土した砥石と考えられる石片で、2面に擦痕をとどめ、なめらかになるまで摩耗がすすんでいる。また、一部には刃物様のもので刺突した痕跡も残す。石材は灰白色を呈する緻密な石材である。外面は火を受けて黒ずんでおり、その火を受けた際に、この砥石は破損したものと考えられる。

3は、第6調査区から出土した磨製石斧片で、残存長10.0cm、幅6.3cm、厚さ3.1cmを測る。淡緑色を呈する砂岩質の石材は、風化が進んでおり、石器として製作された時点の研磨痕はないが、1側面のみに研磨痕をとどめている。これは石斧が折損した後に、砥石

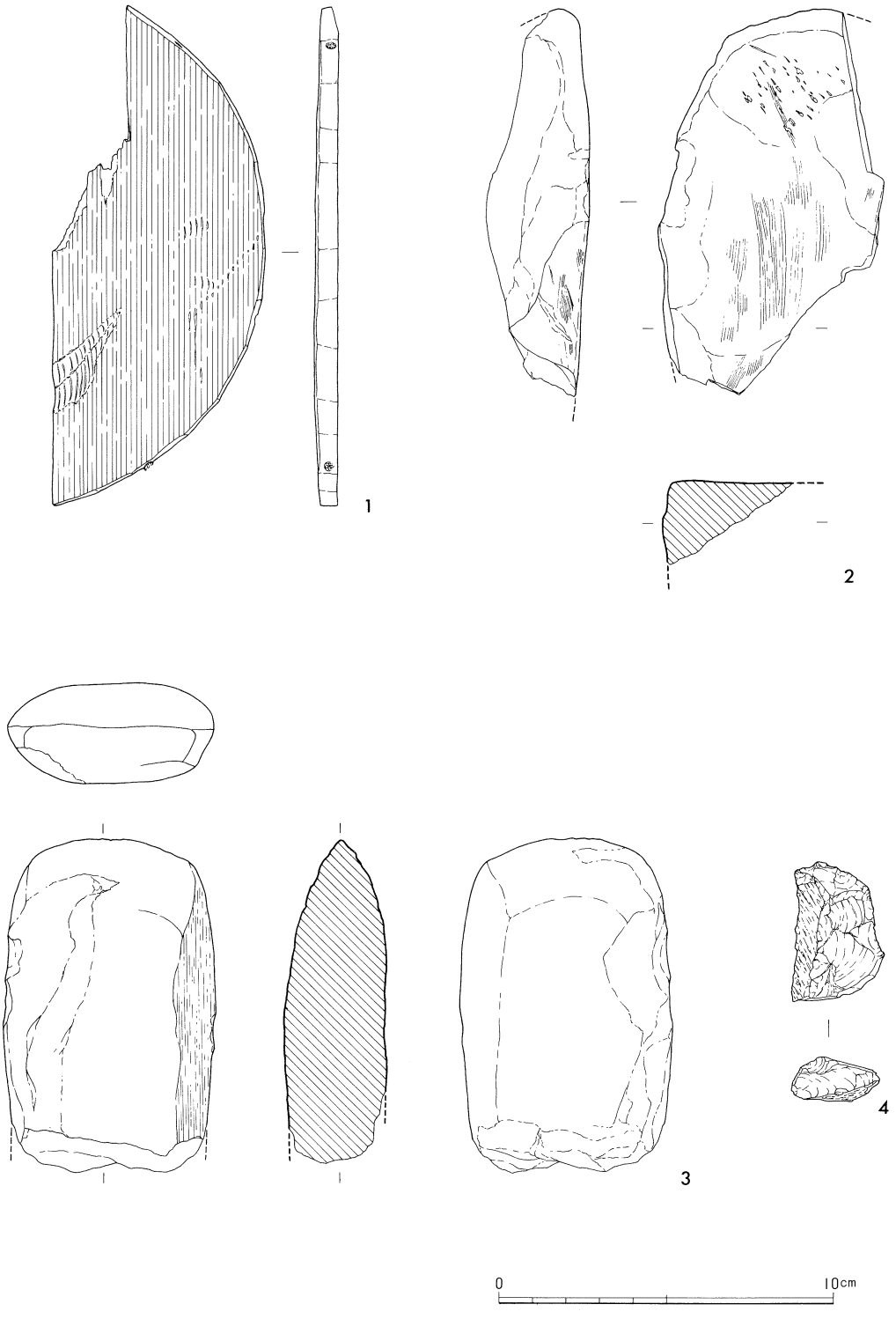


図５　後釜調査区出土遺物実測図

（1/2，１；第１調査区，２；第２調査区，３，４；第６調査区）

に転用されたことを示すものと考えられる。

4も第6調査区出土で、2面に原礫面をとどめる黒曜石片である。石器製作の第1段階で、黒曜石原石から剝離されたものであろう。

以上の遺物の時期は、2～4が弥生時代頃、1はそれ以降のものと考えられるが、いずれも正確に時期を同定できる資料ではない。

試掘調査のまとめ

後釜調査区では、6ヶ所設定した調査区のうち、4ヶ所で泥炭状の層を検出している。この4ヶ所は丘陵南辺に沿うもので、現在の水田の広がる一帯が、古くは低湿地であったことが知られた。丘陵東裾の第5・6調査区では、この泥炭層は検出されず、ごく浅い部分で地山となっていた。このことは下図のように第4・第5調査区の間で地山が深く落ちこんでゆく状況が推測できる。この地山の落ち込みに滞水し、その滞水の状況、流水量に応じて、粘質土層や泥炭層が形成されたものと考えられる。

同様の状況は、南北の土層模式図でも認められる。かなり急な角度で落ち込む丘陵は、調査区を設定した水田下でも、同様の傾斜で下ってゆき、これに粘質土や泥炭がかなりの厚さで堆積している。

この状況から、現在の水田下にはかなり深い谷地形が埋没しているものと考えられ、旧地形は全く景観の異なるものであったことが推測できる。

しかし、この谷地形は、長期間をかけて埋没したものと考えられるが、その含む遺物が明らかでないため、泥炭層などが形成された時期は現状では明らかにしえない。

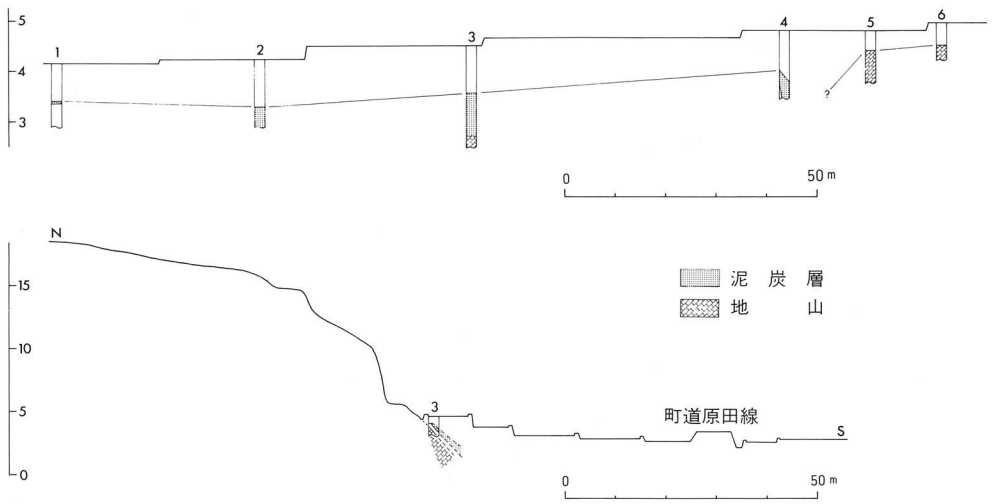


図6　後釜調査区土層模式図

2．小勝間調査区

小勝間山は南北75m、東西40mの平面楕円形の小丘で、最高所で標高16mあまり、水田との比高は約12mで、あたかも水田に浮かんだ小島のような外観である。この小丘はその裾で崖となって水田に至っているが、この丘の南側をめぐる水田の畦には、丘と相似な弧を描く部分があり、この畦は丘裾の傾斜のゆるやかな部分を削り、水田とした際の痕跡を示すものであろう。

この丘のなだらかな尾根上に幅２ｍのトレンチを長短５本、延約32m入れて試掘を行った。北のものから順に第１…第５調査区と呼称する。

小勝間山の最高所には、直径約１ｍの松の大木があり、この部分にわずかな高まりがある。第１、第２調査区は、松を避けながら、この高まりを断ち割れるように設定した。

第１調査区は、長さ6.5ｍのトレンチであるが、南端で松の根により一部攪乱されている以外は、何の変化も認めることはできなかった。ただし、地表面の腐植土中からカワラケ１を検出した（図11）。

第２調査区では、表土と地山が根によって攪乱された赤茶色粘質土が堆積しており、その下は黄褐色の地山となる。調査区の南側ほど堆積土は薄くなっている。この調査区では、土坑２が検出されているが、ともに伴う遺物はない。調査区内からは地表近くで、鉄片、黒曜石片をそれぞれ１点採集した。

土坑１は、調査区の関係から全掘していないが、ゆるやかな落ち込みで、後世の木の根が入りこんでいるため、その形は判然としない。さしわたしは1.8ｍを測り、深さは0.4m前後になるものと考えられる。土層からは北半の土坑を南半のものが切っている可能性があるが、平面形で確認するには至らない。

土坑２は、長径0.7ｍ、短径0.5ｍを測る平面楕円形のもので、検出面からの深さは、0.3ｍである。坑内には赤茶褐色土を切るようにして茶褐色土が堆積している。

第３調査区は、畑地に設定した長さ12.5mの調査区である。土層は、約0.2ｍ前後の耕作土と、0.1m前後の耕作によって攪乱された地山からなる。この調査区では、遺構、遺物ともに検出されなかった。

第４調査区は、長さ3.6ｍのトレンチである。厚さ0.2ｍ前後の耕作土と0.1ｍの攪乱された地山の赤色土が堆積していた。この調査区内からは浅いすり鉢状の土坑が検出されている。平面楕円形を呈し、長径0.8ｍ、短径0.5ｍ、検出面からの深さ0.2ｍを測るものである。さらにこの坑底で径、深さともに0.15mの小さな土坑が掘りこまれている。坑

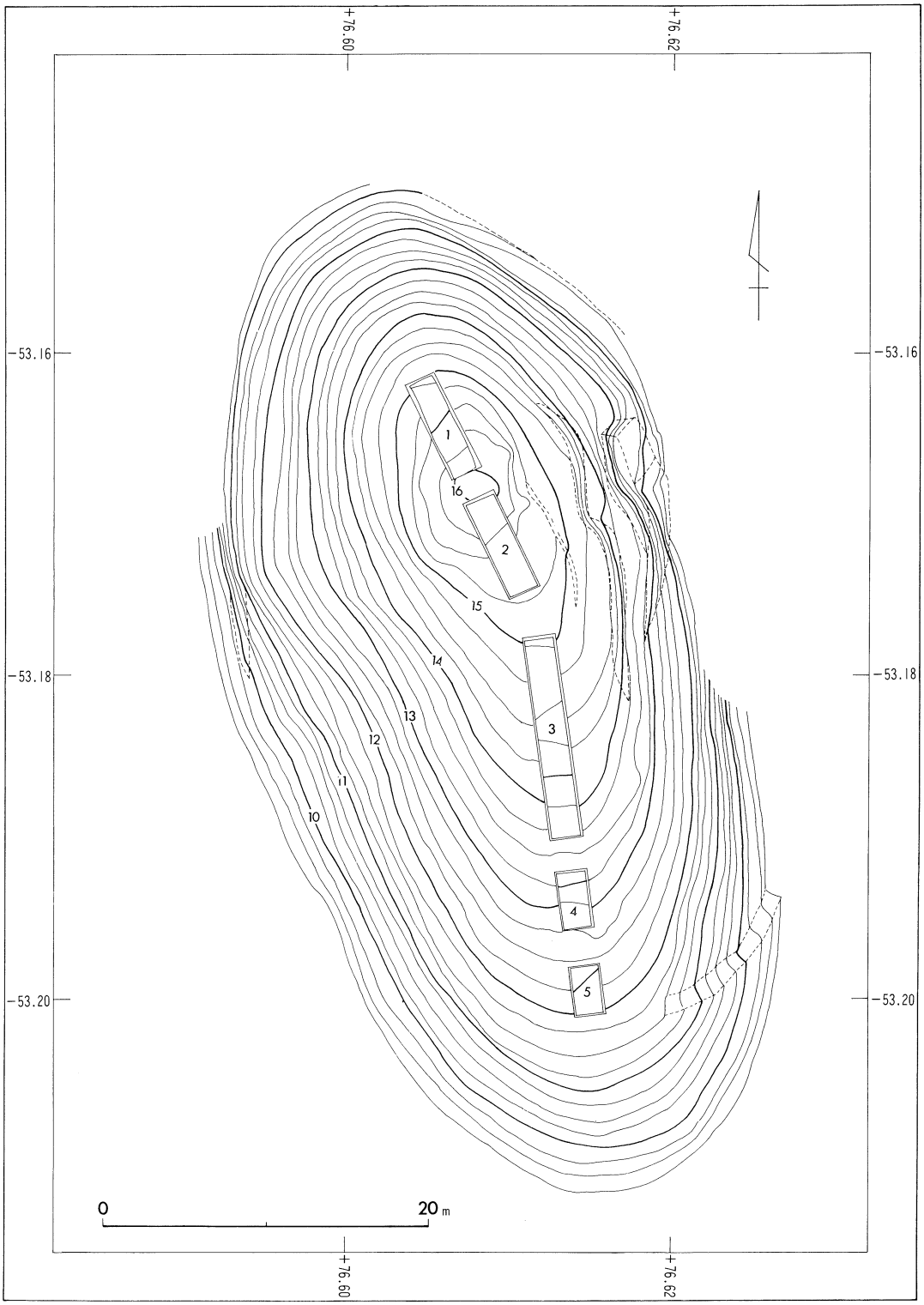


図 7　小勝間調査区測量図（1/400）

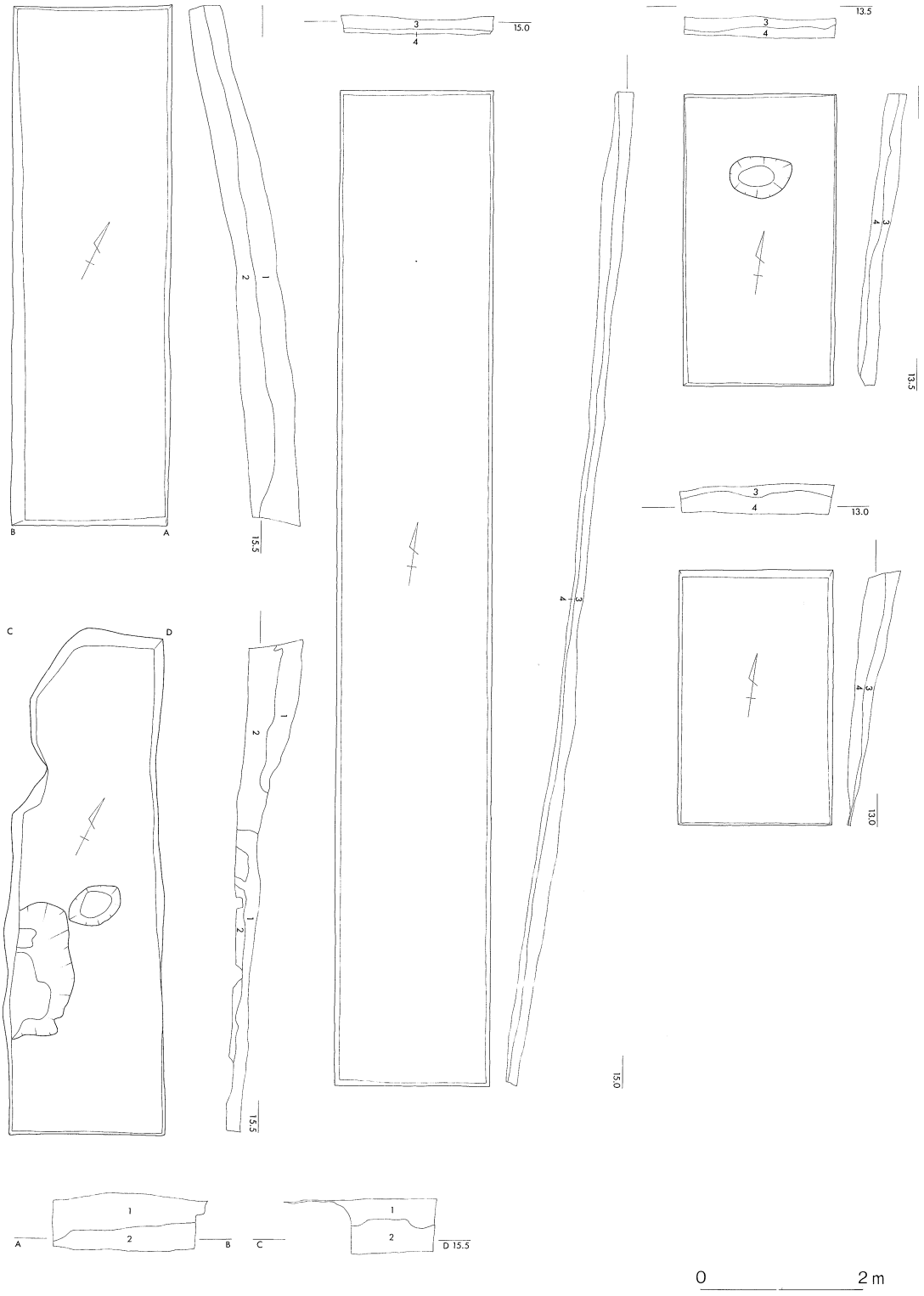


図 8　小勝間調査区・断面図（1/80）

内にはわずかに炭化物を含む淡茶色土が堆積している。

第５調査区は、長さ3.1ｍのトレンチである。土層は第４調査区とほぼ同様の堆積状況を示す。この調査区では遺構、遺物は検出されていない。

遺　物　第２調査区から出土したカワラケは、浅い皿状を呈し、口径8.5㎝、底径4.2㎝、器高1.6㎝を測る。底部はわずかに上げ底状を呈し、口縁端部はかすかに内湾する。内外面とも回転ナデを施し、外面底部のみはナデ調整で仕上げる。色調は淡橙色を呈し、胎土にはわずかに長石粒を含むが密である。また、器表内外面には黒ずんだ部分があり、灯明皿として使用された可能性がある。この他に図示できないが、香炉かと考えられる陶器片がある。外面には淡緑色の釉薬がかかる。これらはいずれも近世の遺物と考えられる。

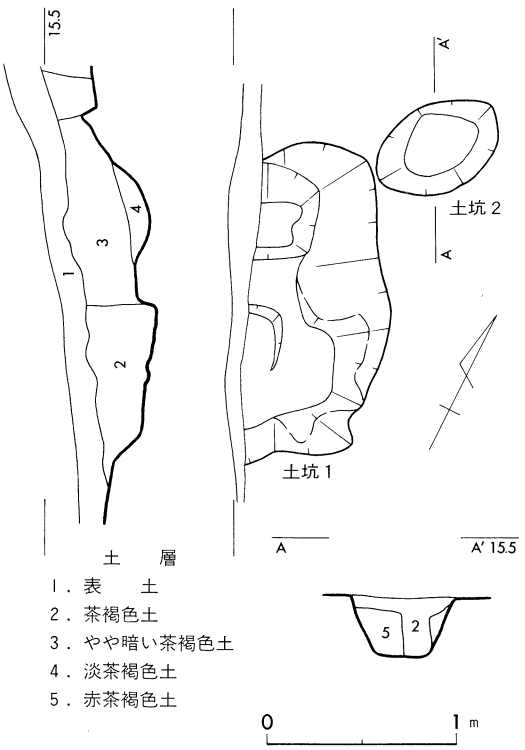


図９　土坑１・２実測図（１／40）

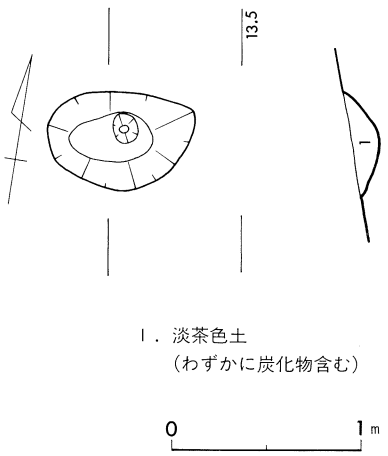


図10　土坑３実測図（１／40）

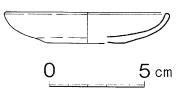


図11　小勝間第１調査区
出土遺物実測図（１／４）

試掘調査のまとめ

この小勝間山は、古くからその独特の外観により、付近の人々に親しまれており、さらにその頂上には代々、松の大木が植えられ、その姿は絵に描かれ、歌に詠まれてきている（巻頭図版）。この山は「庭鳥塚」とも呼ばれている。また、『出雲国風土記』島根郡の条にみえる「加都麻社」に『雲陽誌』、『八束郡誌』はこの山を比定しているが、勝間山という山は別に隣接して存在するので、この点は明らかではない。少なくとも、試掘調査の結果には、信仰を推測させるような遺構は検出されていない。

3．藤 山 調 査 区

藤山は、湯戸の盆地の東端、講武平野の西端に位置する東西、南北約 140m の小山である。現在、そのほとんどの部分が茶畑などの畑として耕作されている。標高約22ｍ、周囲の水田との比高約16m を測る頂上から平坦面、急斜面をくりかえして水田に至っている。この頂上からの眺望は高さの割にかなり良く、特に講武平野に向かってはすぐれており、そのかなりの部分を視野におさめうる立地である。

この小山の最高所が調査前から方形台状を呈しており、古墳の可能性が考えられたので、この部分について周辺の地形も含めて、測量調査を実施した。その結果、後述するように試掘調査区からは、古墳の主体部などの遺構は検出できなかったが、測量図には明らかに古墳と考えられる等高線が認められた（藤山古墳）。

これによれば、墳丘南・西側で畑のために大きく墳丘を削られてはいるが、最も残存状態が良好なのは、東側斜面および、そこから南側斜面にかけてのカーブである。また、斜面がかなりゆるやかになるとはいえ、墳丘西辺もいくぶんかは当時の斜面を保っていると考えられる。よって、東側での墳裾 18.25m のコンター、西側の墳裾を 19.25ｍのコンタ

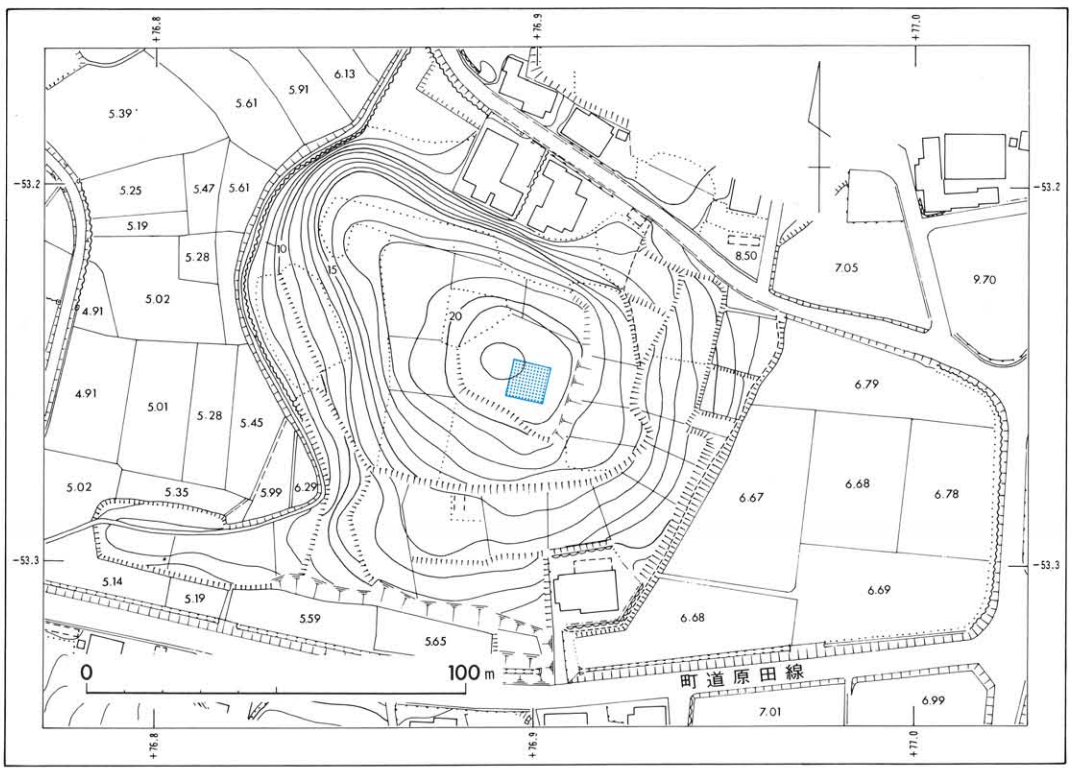


図12　藤山調査区配置図（１／2,000）

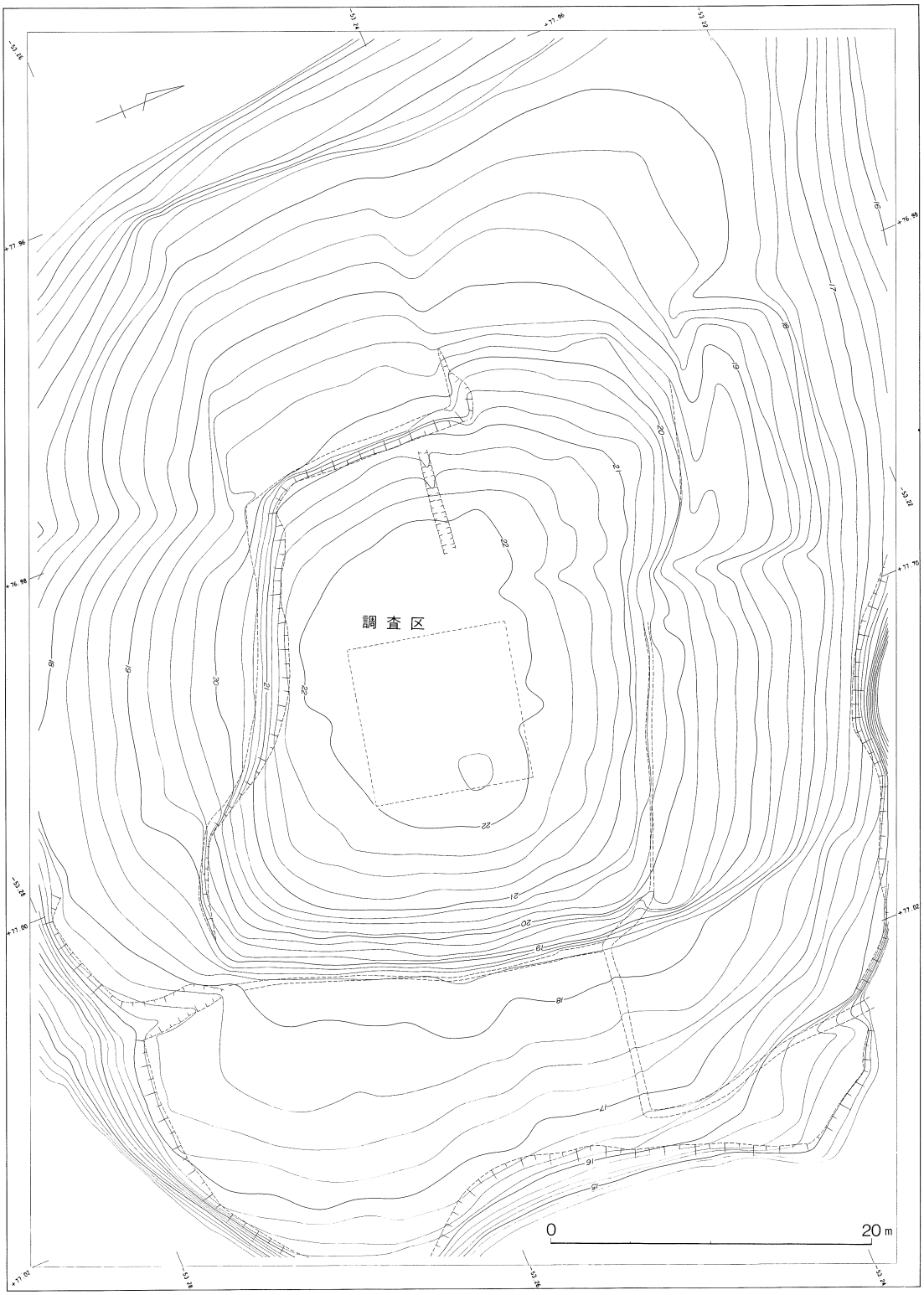


図13　藤山古墳測量図（1/400）

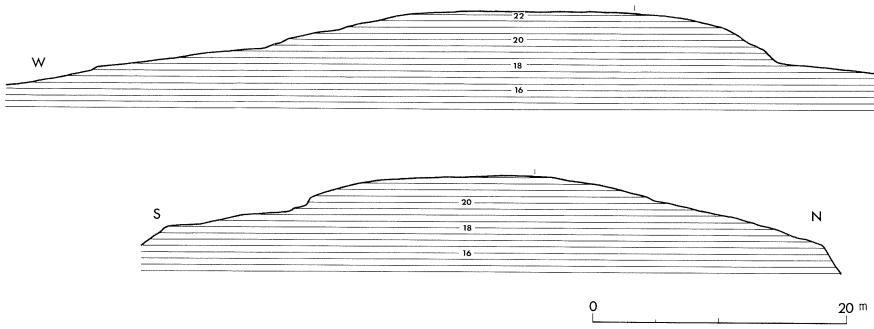


図14　藤山古墳墳丘断面図（１／600）

ーとしてみると、墳丘の東西は41mとなる。同様に南北で考えると、南辺をとどめると考えられるのは南東のコーナーで、ここでの19mのコンターを、北辺北西隅の20mのコンターをそれぞれとりあえず墳裾として考えると、墳丘の南北は、30mということになる。ただし、遺存状態のよい墳丘東斜面は、かなり茶畑で地形を改変されているものの、30mをこえて北に続いたのちに屈曲しており、この屈曲をもって墳端とできる可能性もなくはない。同様に北西でも、18mのコンターに畑によって地形がかなり変わっているものの、直角に近く屈曲する部分があり、東側での屈曲に対応するものと考えられなくもない。ここをもって墳裾と考えると、墳丘南北は40mとなり、一辺40mの正方形のプランを示す古墳である可能性も考慮される。しかし、墳頂にかなり良好な平坦面を有しており、墳頂の土砂がそれほど北に流れ出しているとは考えにくいので、現状では東西40m、南北30mの平面長方形を呈する古墳と考えておく。

墳頂平坦面は明瞭ではないが、東西20m、南北15m程度のものと考えられる。墳丘の高さは、東辺で約４mを測る。現状では葺石等の石材は認められない。また、崖面にあらわれた土層の観察からは、少なくとも墳丘下半は岩盤であり、この岩盤を削り整えて墳丘の基盤としているようである。

試掘調査は、この藤山の頂上の平坦面に10×10mの調査区を設定して実施した。調査区内には、0.1～0.3mの耕作土がまんべんなく堆積しており、この下に部分的にではあるが、淡褐色土層がある。この層を除去すると、地山ブロックを大量に含む黄赤褐色土が調査区内ほぼ全面を覆うように堆積している。この層に掘り込まれるのが明るい淡褐色土とわずかに暗い黄赤褐色土で、前者が調査区内で直角に屈曲する溝１の覆土で、後者が土坑１である。

この黄赤褐色土は、調査区西側で最も厚く、0.4m近くに達するが、調査区北辺近くで

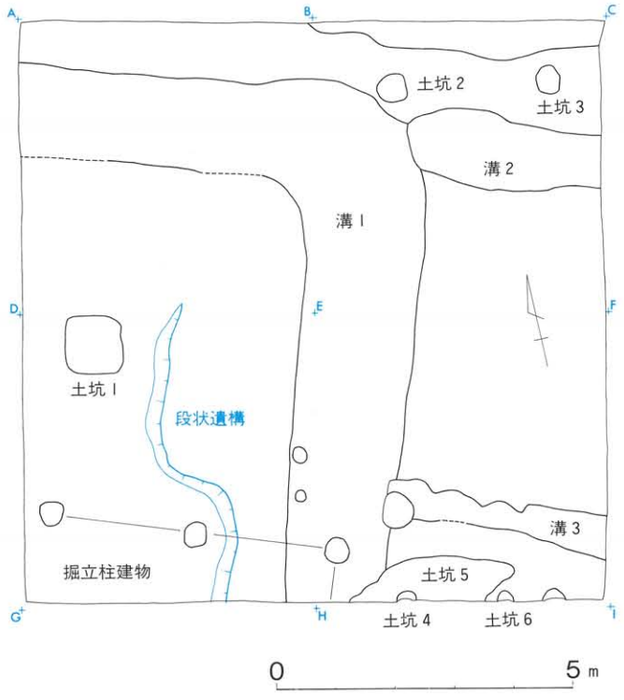
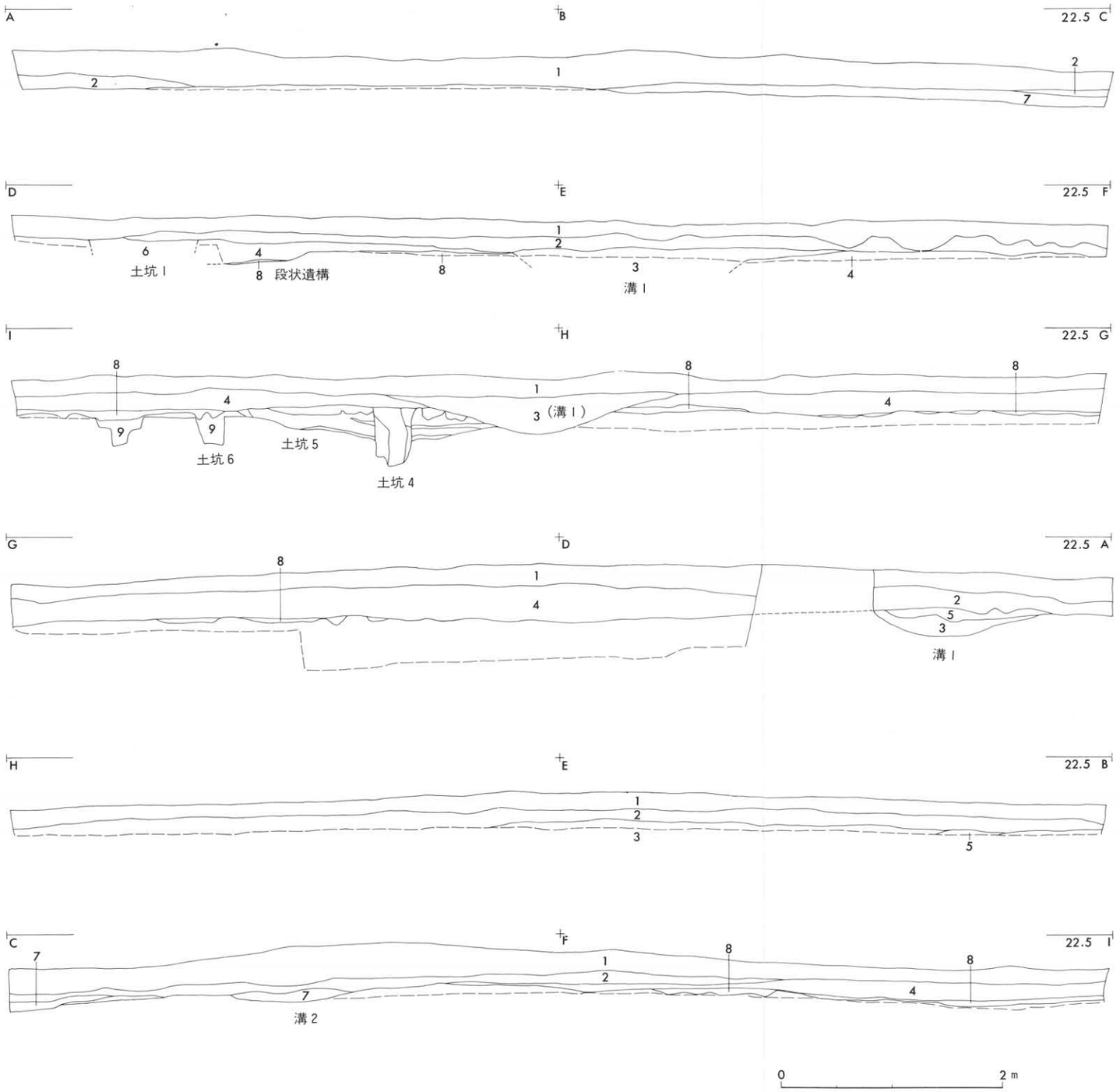


図15　藤山調査区内遺構配置図（1/120）



土　層

1．耕　作　土
2．淡 褐 色 土
3．明るい淡褐色土
4．黄赤褐色土
5．赤色粘質土
6．わずかに暗い黄赤褐色土
7．やや暗い淡褐色土
8．黒　色　土
9．黄褐色土（炭化物含む）

図16　藤山調査区土層図（1/50）

は、ほとんど認められない。この土層の直下には、後述する弥生時代後期の旧表土層があり、これにのる黄赤褐色土層は古墳に伴う盛土と考えられる。この層に含まれる大量の地山ブロックは、墳丘裾の崖面でみられる岩盤が粉砕されたものと考えられる。おそらくは、墳丘を成形する際に削り出された土砂を墳頂に盛ったものであろう。

この盛土層の下にある黒色土は、厚さ0.05m前後と薄いが、調査区北側を除いてほぼ全面に堆積している。層中にはかなりの量の炭化物を含んでおり、土器等の遺物はわずかしか認められないが、古墳築造以前の生活面と考えられる。また、この層の上面には若干の凹凸があり、一部では段となっている。この凹凸が、古墳築造時にすでにあったものか、旧地表に盛土をする際に何らかの加工を旧地形に対して施したために残ったのかは不明である。この黒色土内から土坑5などが掘り込まれており、わずかではあるがそれに伴う遺物から、この層の時代が推測しえた。

この黒色土の下層は、やや軟質の黄褐色土で、これが地山と考えられる。

溝　1　調査区西辺から南辺まで屈曲して掘られている溝である。調査区内でほぼ直角に屈曲する。検出面での幅は1.5～2.1ｍで、深さは約0.2ｍである。土層の観察によれば、検出された遺構のうちでは最も新しいものと考えられる。

この溝の断面は、ごくゆるやかな「V」字状を呈し、東・北の溝底部分にかなりはっきりした立ち上がりが認められた。溝内には明るい淡褐色土が全面に、淡褐色土がほぼ全面に堆積している。これらの土層は比較的よくしまっている。この上層、溝東西辺から屈曲部分にかけて、点々と赤色粘質土の浅い落ちこみが認められる。この土層は非常に軟かく、溝に相当する部分でのみ検出され、注意をひいた。

この溝に伴う遺物はなく、時期は不明であり、限られた部分での検出のため、何のために掘られたものかは明らかでない。

土　坑　1　調査区西辺寄りで検出された土坑で、平面は隅丸の正方形を呈する。一辺は約1ｍ、検出面からの深さは0.3ｍである。さらにこの底面の西に偏った位置には、もう一段の落ちこみがある。この落ちこみも平面形はほぼ四角で、一辺約0.4ｍ、深さは0.1ｍを測る。

この土坑は、古墳の盛土と考えられる黄赤褐色土から掘り込まれ、盛土下の黒色土を貫き、地山まで達している。坑内につまる土は、わずかに暗い黄赤褐色土で、粘性はかなり高い。

一見すると柱穴状を呈するが、調査区内では同様の土坑はこの1穴のみであり、その性格は不明である。時期は伴う遺物がないために不明だが、その掘り込まれる土層から、古

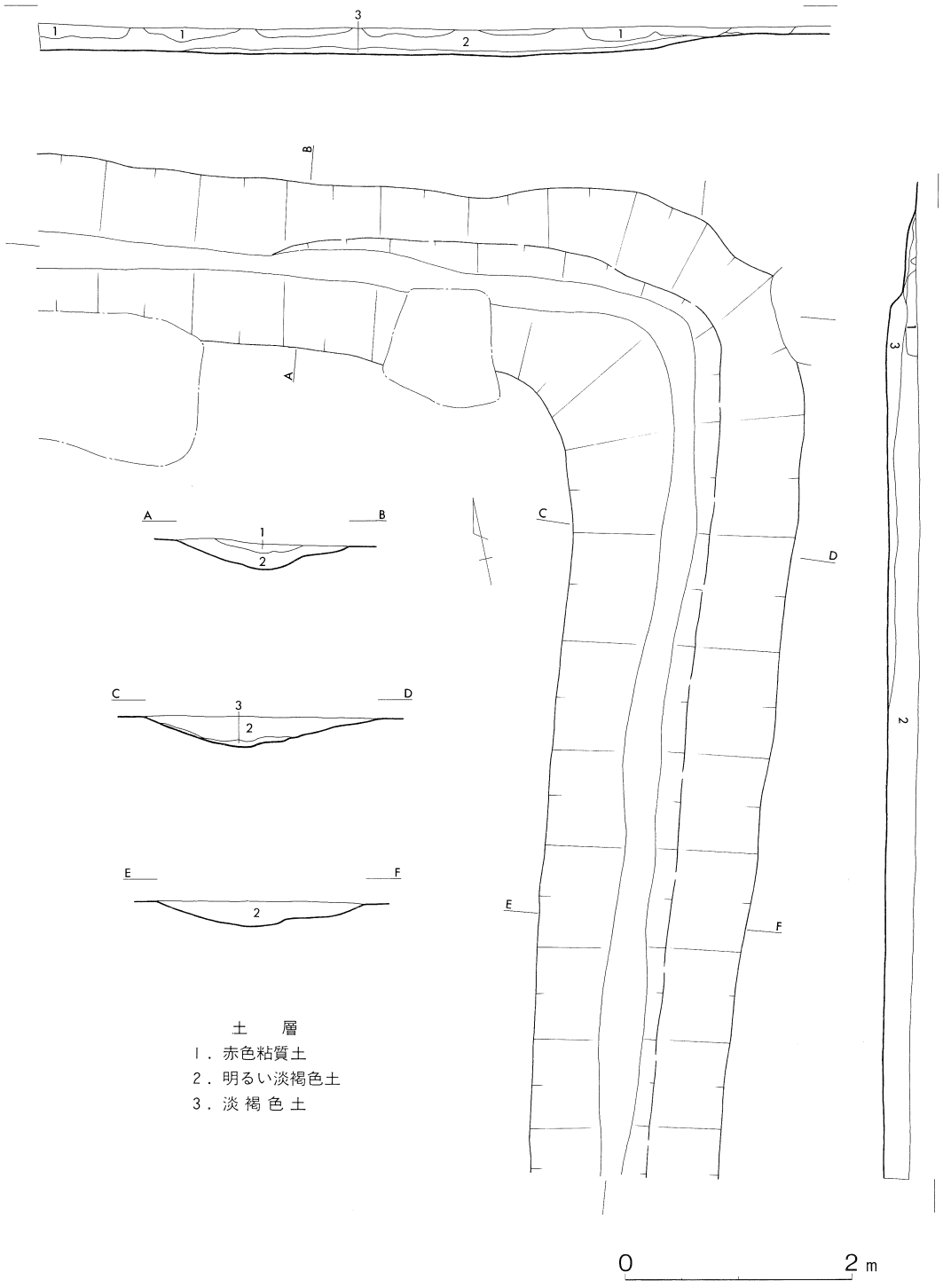


図17　溝１実測図（1/60，レベルは22.0m）

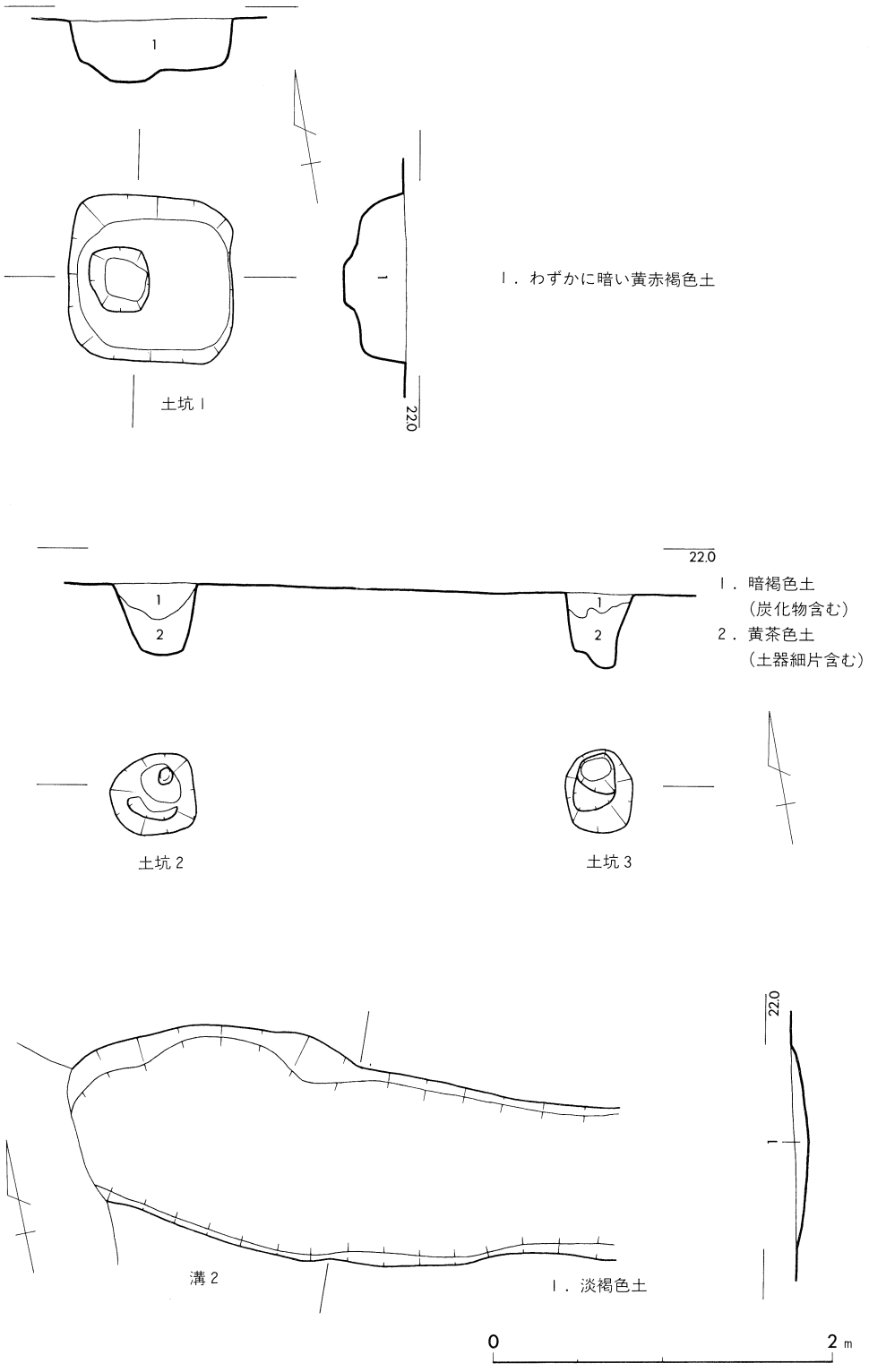


図18　土坑 1 ・ 2 ・ 3 , 溝 2 実測図（1/40）

墳に伴うか、古墳時代以降、溝１が掘り込まれるまでの間と捉えることができる。

土坑２・３　調査区北東で検出された土坑である。西側の土坑２は、径約0.5ｍ、検出面からの深さは0.4ｍを測る。底は径約0.3mである。坑内には上層に炭化物を含む暗褐色土、下層に黄茶色土が堆積している。この黄茶色土中に擦痕を有する磨石１があった。土坑３も、ほぼ土坑２と同様で、径約0.4ｍ、深さ0.5ｍを測り、底は２段となっている。坑内には上層に暗褐色土、下層に黄茶色土が堆積しており、この黄茶色土中には土器細片を含んではいるが、時期を推測しうるほどの資料ではない。

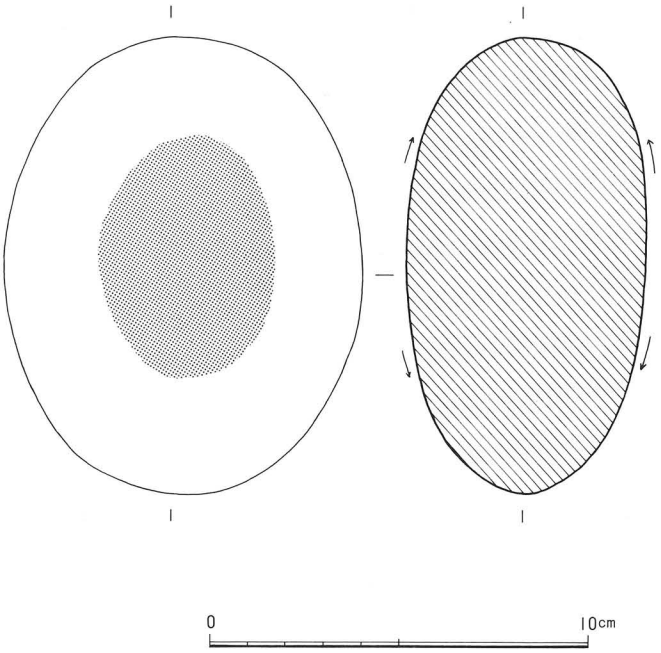


図19　土坑２出土遺物実測図（１／２）

土坑２・３の間隔は、約2.5ｍであり、後述する掘立柱建物の柱間寸法と一致し、これらも掘立柱建物となる可能性があるが、調査区隅での検出であり、詳細は不明である。時期は不明であるが、坑内上層に堆積する炭化物を含む暗褐色土は、後述する弥生土器を含む土坑などと類似しており、近い時期が考えられる。

土坑２から出土した磨石（図19）は、やや偏平な円礫である。長径12.0cm、短径9.5cm、厚さ6.4cmを測る。表裏の平坦な部分に擦痕を有しているが、その擦痕はさほど長期間使用されたとは考えにくい。

溝　２　土坑２・３の南側に掘られるごく浅い溝で、西端は溝１によって切られており、東側では、調査区外にさらにのびる。幅は0.9～1.3mを測り、検出面からの深さは0.1ｍで、横断面ではゆるやかにくだっている。溝内には、淡褐色土が堆積する。出土遺物はない。

溝　３　調査区南東付近で検出したもので、古墳盛土下から掘り込まれており、溝内に堆積するのは、旧表土と同じ黒色土である。

この溝は、西端を溝１によって切られ、東側は調査区外にさらにのびている。幅は0.3

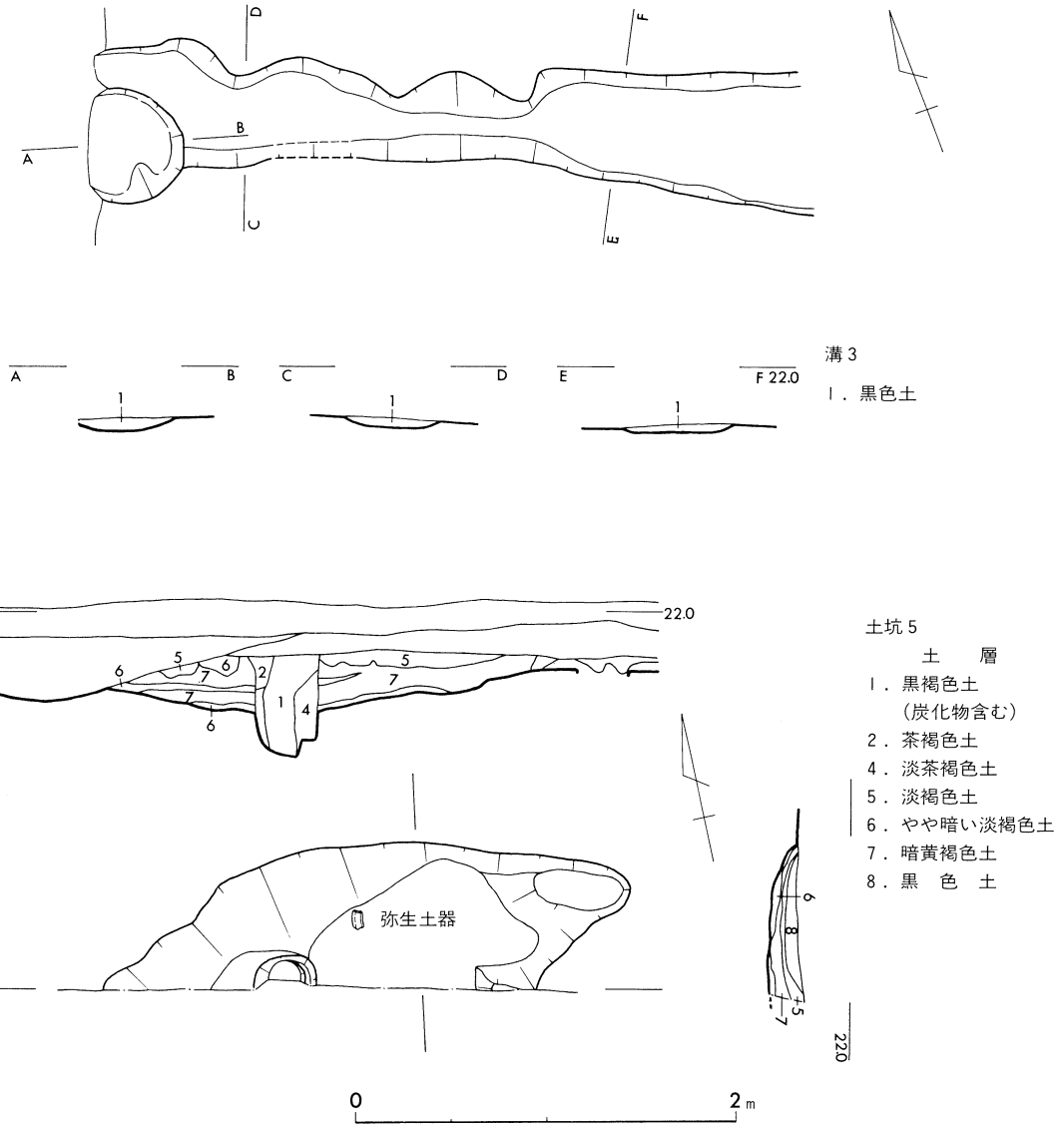


図20　溝3、土坑5実測図（1/40）

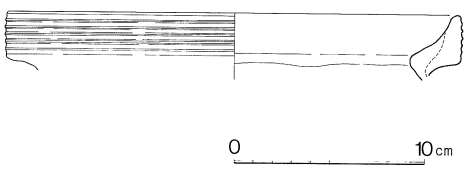


図21　土坑5出土遺物実測図（1/4）

～0.8ｍで、検出面からの深さは、0.05mを測る。出土遺物はない。この溝の西端近くにごく浅い土坑がある。平面円形で、径0.6m、深さは0.1ｍを測り、溝と同様の黒色土が堆積する。

土坑4・5　調査区南辺に沿って検出されたもので、やや大形の土坑5を小形の土坑4が切って掘り込まれている。

土坑4は、盛土下から掘り込まれ、径0.4ｍの平面円形を呈する。深さは、0.5ｍを測り、柱穴状を呈し、底は2段となっている。坑内には炭化物を多く含む黒褐色土が堆積し、それをとりまくように茶褐色土、淡茶褐色土が堆積している。

土坑5は、旧表土から掘り込まれており、その西側は溝1によって切られている。平面形は不整な楕円形を呈し、調査区内で検出されたさしわたしは2.8ｍ、幅は約1ｍ、検出面からの深さは0.2ｍを測る。底は平坦である。坑内には、黒色土、淡褐色土、暗黄褐色土、やや暗い淡褐色土がサンドイッチ状に堆積する。坑内には弥生土器が1片含まれていた。

この弥生土器（図21）は、甕口縁部で、推定口径約24cmを測るものである。口縁は、下端から短く直立するもので、外面に6条のクシ描沈線を入れている。風化が著しいが、内外面ともヨコナデで、体部内面はヘラケズリを施しているように見える。口縁部外面にはススが付着している。胎土は微砂粒をかなり多く含み砂質で、焼成は不良である。色調は

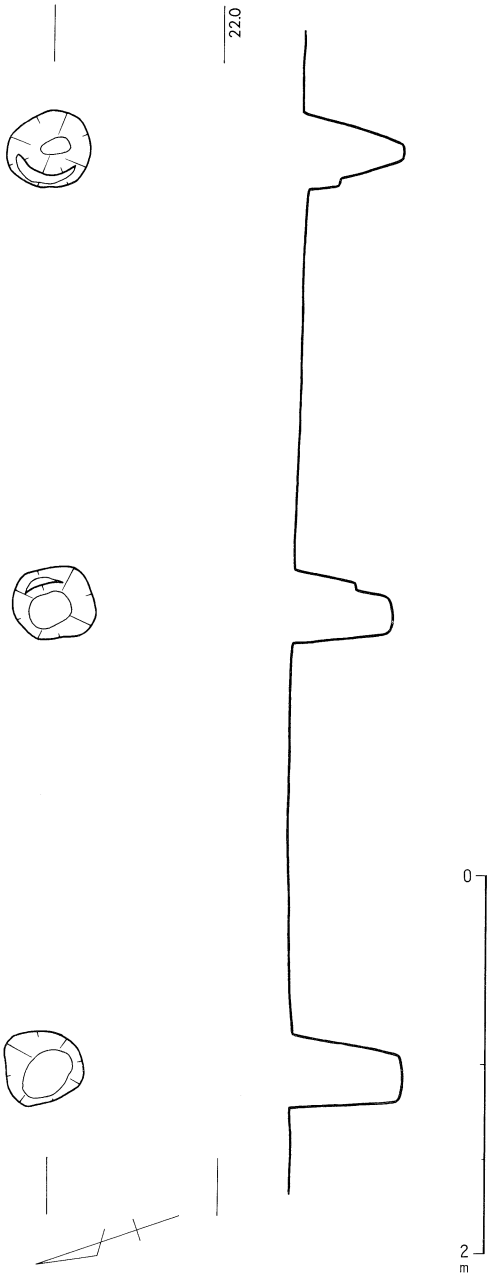


図22　掘立柱建物実測図（1／40）

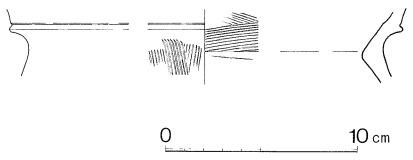
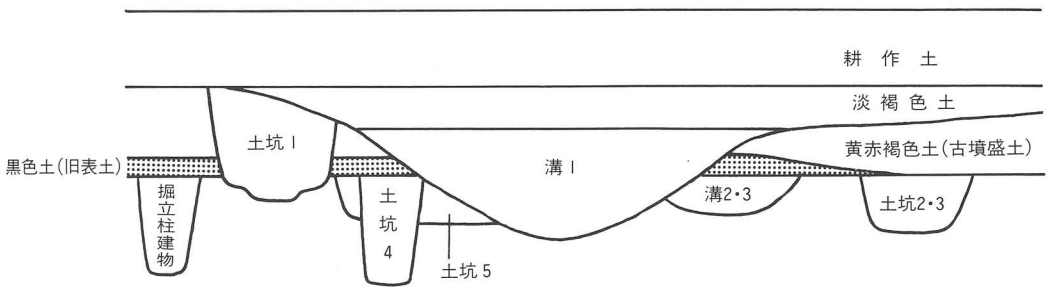


図23　掘立柱建物出土遺物実測図（1／4）

黄褐色を呈する。弥生時代後期前葉の遺物と考えられる。

掘立柱建物　この遺構は、調査区南西で検出されたもので、部分的にしか検出されていないが、・3個の土坑がほぼ2.5ｍの間隔で一列に並び、掘立柱の建物と考えられた。柱穴は径0.4ｍ前後、検出面からの深さは0.5～0.6ｍである。この柱穴内には、旧表土と類似する炭化物を含んだ黒褐色土が堆積していた。一連の柱穴は、東端のものより東には相当するものがないので、この柱を北東隅とする建物が想定できる。この建物の西および南については調査区外に続くため不明である。西端の柱穴内上層から弥生土器１片が出土している。

この弥生土器（図23）は、甕口縁部付近で、推定口径20cm前後のものと考えられる。頸部から外反する口縁部は、その下端で外方に突出し、さらに上方へ続いてゆく。頸部外面にはタテ方向のハケメ、口縁内面にはヨコ方向のハケメを施す。肩部内面にはヨコ方向のヘラケズリを施している可能性がある。胎土は微砂粒を含み砂質で、焼成は不良である。色調は黄褐色を呈する。弥生時代後期の遺物と考えられる。



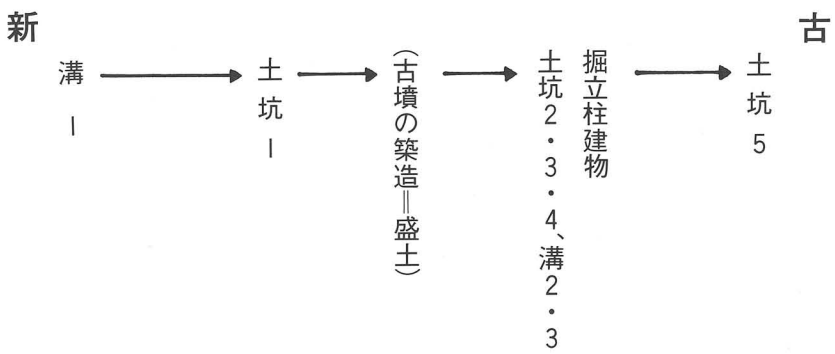


図24　遺構新旧関係模式図

Ⅳ．小　　結

名分湯戸遺跡群は、後釜調査区、小勝間調査区、藤山調査区と３ケ所でわずかな面積を試掘したにとどまったが、その結果には注目すべき点を多々含んでいる。以下、それぞれの調査区毎にその明らかになった点について記して、小結とする。

後釜調査区

この調査区では、丘陵裾と考えた部分に設けた試掘坑で、予想を裏切って泥炭層が検出されたことにより、現在目にする地形と旧地形が全く異なるものであった点を明らかにしえた点であろう。この調査結果によれば、湯戸地区の現在の水田のほとんどは、かつては葦などの生い茂る沼沢地であったと考えられ、泥炭の堆積状況からは、滞水はするがそれほど水流のない地形が想像される。しかし、泥炭層に伴う遺物はなく、この地形がいつ形成され、どの時代に水田になったのかは、今回の調査では明らかにはできなかった。

しかし、わずかではあるが、いくつかの調査区では遺物の出土をみており、調査地上方の丘陵やその斜面に時代は特定できないが、集落址があるものと考えられる。こうした集落の人々の度重なるこの湿地への働きかけによって、水田は形を整えていったものと考えられる。

小勝間調査区

小勝間山は、その独特な外観により、古くから付近の人々に親しまれている。『出雲国風土記』島根郡の条にみえる「加都間（かつま）社」がこの山とする説を『雲陽誌』、『八束郡誌』はとっているが、この説はにわかには肯じがたいことは、

第三節　名勝舊跡

一、小勝間山

小勝間山は大字名分にあり、佐太川の東岸に臨んで田疇の上に浮べる一小丘である。形楕圓形にして傾斜緩く、恰も龜甲の水面にあらはれたやうである。乃ち佐陀大社の舊附屬地で此處に祀れる風土記社勝間神社は、正哉吾勝々速日天忍穗耳命を祀つてあるこゝ神へ、佐陀大社の末社として神木及び境内ともに保護されて來たものである。

社殿は以前より廢れて　松の大樹を社の代りに祭つてある。此の老松は享保の頃枯死し、補植したる老松も落雷のため枯死し、現今のは三代の松として、明治四十年頃土地の人本田繁滅の補植にかゝり、高さ二丈餘に達してゐる。

雲陽誌に　勝間神社は正哉吾勝勝命なり、又鹿島塚といふ松一株あり、此下に神代の常世の長鳴鳥を埋めたり、今も時々鳥の發するとなん、故に湯戸杉廻の兩里には古來庭鳥養はず、勝間山の雞呼びさるといひ習はせり、水無瀬中納言の歌に、

おのづから國の魔はらふ勝間山さか枝松の千代に千代ふる

此の松の大さ三圍あまり高十二間、東と西とへはびこりたること三十間ばかり、南北へ三十三間ほどあり、枝垂れて土に入り、夫より上へ直に生上れり、枝の大さも一抱ばかりもあらんか、二三十本ほど立ちて、外より植ゑたる如し、遠きより見れば盛をはるが如く、又一の青山の如し。……是れ本朝第一の松なり、云々。

かはらじよ傳へて幾世まつの葉のやなの神令守るをそみつ

枝垂れてれはふめぐりの蔭ひろみ幾世かこゝに小勝間の松

入江民部少輔相尙

冷泉權大納言爲村

第二十二章　諸武村

七四七

『八束郡誌』本篇

前述した。「加都麻社」の比定はおくとしても、「庭鳥塚」との地元での呼称もあり、いわゆる金鶏伝説も伝えられている。また、この丘上には、松の木が代々植えられて現在に至っている。この丘と松の姿は、歌や絵に好んで描かれる題材でもあった。

こうした歴史的に由緒のある土地ではあるが、試掘調査の結果には、その信仰を窺わせるような遺構は認められず、遺物もカワラケ１点の出土にとどまり、この丘をもって遺跡とは呼びえない状況である。

藤山調査区

この調査区では、丘陵最高所にある高まりが長辺40m、短辺30mの大規模な古墳であることを明らかにし、これを名分藤山古墳としたことが第1の成果として挙げうるであろう。しかし、この墳頂と考えられる平坦面に設定した調査区では、古墳の主体部と考えられる遺構は検出することができなかった。

鹿島町域内では、近年数多くの古墳の存在が明らかになりつつあり、特に現在の大字名分地内で顕著である。具体的には、50余基からなり、礫床をともなう箱式石棺、箱式木棺を主とする主体部をもち、仿製鏡、石製宝器類などの遺物を出土している前半期を中心とする奥才古墳群[13]、10余基からなり群構成などで奥才古墳群と類似する鵜灘山古墳群[14]、古式の前方後方形を呈する１号墳を含む名分丸山古墳群[15]などがそれである。

藤山古墳はこうしたなかにあっても、その墳丘規模は卓越している。図25のように、その規模は全長でわずかに鵜灘山６号墳には及ばないものの、その築造に投入された労働力は藤山古墳の方がはるかに大きかったと考えられる。奥才古墳群中で最大の方墳である13号墳と比較すれば、その大きさは容易に理解できよう。さらにその規模は、大形の方墳が数多く分布する島根県下にあっても、第８位の規模を有している（表１）[16]。

この名分藤山古墳の立地は、標高20mあまりとさほど高くはないが、講武の平野のかなりの部分を視野に納めうる位置で、その築造の基盤を推測させる。おそらくこの古墳は、講武平野で展開した首長墓の系列に重要な役割をもって参画した首長の墳墓と考えられる。

藤山古墳の時期は明らかにできなかったが、名分丸山古墳群、奥才古墳群、鵜灘山古墳群とならんで築造され、その系列は径38mの円墳である堀部古墳[17]、装飾付須恵器を出土し、横穴式石室を有していたと伝えられる向山古墳[18]、石棺式石室系の横穴式石室である岩屋古墳[19]にひきつがれるものと考えられる。しかし、これら北講武の規模の大きな古墳は、時期の不明な堀部古墳を除いて後期古墳と考えられ、名分の前記古墳との間には若干の時期差が認められるようである。こういった間隙を埋める作業は今後の課題である。

また、藤山古墳墳頂部に設定した調査区では、古墳の盛土下から、弥生時代と考えられ

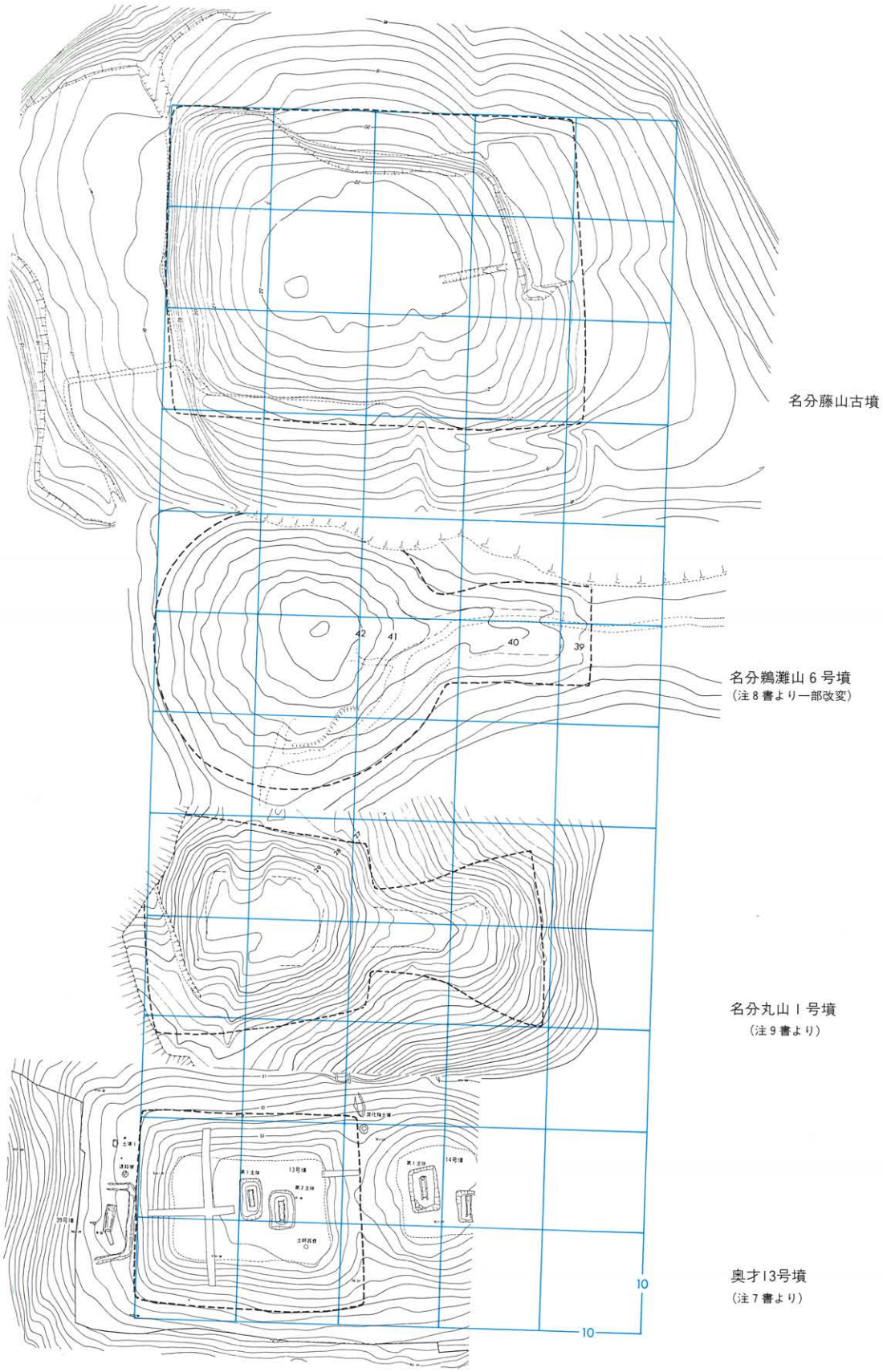


図25　町域内古墳墳丘規模比較図（1/600）

る遺構が検出されている。この遺構面には黒色の旧表土が薄くではあるが堆積しており、かなり広い面積に及ぶものと考えられた。この藤山の地形を細かくみると、水田面から最高所である古墳墳頂に至るまでに何段もの平坦面が連なっており、こうした面に墳頂調査区で検出したような遺構が埋蔵されていることが予想される。

表１　島根県下の大形方墳（方形墓）

	名　　称 （所　　在）	規　　模 （辺長・m）	主体部・出土遺物ほか	備　　考
1	造山１号墳 （安来市荒島町）	60	竪穴式石室２ １）仿製方格規矩鏡、仿製三角縁三神三獣獣帯鏡、ガラス製管玉２、刀 ２）仿製方格規矩鏡、碧玉製紡錘車、ガラス製管玉、剣身残欠、刀子残欠 円筒形土製品	国指定史跡
2	造山３号墳 （安来市荒島町）	58×44	竪穴式石室１ 斜縁二神二獣鏡１、碧玉製管玉30、ガラス製小玉33、刀子１、鉇１、土師器	県指定史跡
3	丹華庵古墳 （松江市古曽志町）	47	長持形石棺 鉄剣、短甲片、埴輪	国指定史跡
4	大成古墳 （安来市荒島町）	45	竪穴式石室 舶載三角縁二神二獣鏡１、素環頭大刀１、低脚杯２、小形丸底壺３	
5	山代方墳 （松江市山代町）	45	石棺式石室、有縁石床 須恵器、周濠、土墨	国指定史跡
6	大庭鶏塚 （松江市大庭町）	44×42	未調査　造出２ 須恵器、埴輪	国指定史跡
7	石屋古墳 （松江市東持田町）	40	造出２ 須恵器、埴輪	国指定史跡
8	**名分藤山古墳**	40×30		
9	西谷３号墓 （出雲市大津町）	41×28	四隅突出形墳丘墓	
10	神原神社古墳 （大原郡加茂町）	35×30	竪穴式石室 舶載三角縁神獣鏡１、素環頭大刀１、大刀１、剣２、鏃、鍬先、鎌、斧、のみ、鉇外 円筒形土製品、土師器壺	移築
11	塩津１号墓 （安来市久白町）	32×26	四隅突出形墳丘墓 未調査	
12	寺床１号墳 （八束郡東出雲町）	33×21	礫槨 斜縁二神二獣鏡１、大刀１、剣１、ヤス状鉄製品３、勾玉１	移築
13	安養寺３号墓 （安来市西赤江町）	30×20	四隅突出形墳丘墓、一部調査、破壊。貼石、石列23m、土器若干	消滅

※四隅突出形墳丘墓の規模については突出部を含まない数字である。

注１．『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書１　名分塚田遺跡』　鹿島町教育委員会　1985年

２．山本　清「佐太講武貝塚」（『講武村誌』　講武村誌刊行会　1955年）

３．金関丈夫「島根県八束郡古浦遺跡」（『日本考古学年報』16　1963年）

金関丈夫・小片丘彦「着色と変形を伴う弥生前期人の頭蓋」（『人類学雑誌』第69巻３・４号　1962年）

４．山本　清「佐太前遺跡」（『講武村誌』　講武村誌刊行会　1955年）

1985年度、鹿島町教育委員会が佐太神社前で発掘調査を実施した。この地点では弥生時代後期から古墳時代前期の土坑、溝などを検出している。

５．『志谷奥遺跡』　鹿島町教育委員会　1976年

６．1985年鹿島町教育委員会調査。「南講武小廻遺跡」（『鹿島町埋蔵文化財緊急調査報告書』１　1986年）

７．『奥才古墳群』　鹿島町教育委員会　1985年

８．『菅田考古』16　島根大学考古学研究会　1983年

９．『名分丸山古墳群測量調査報告書』　鹿島町教育委員会　1984年

10．『鹿島の遺跡小集』　鹿島町教育委員会　1979年

11．同上

12．『菅田考古』15　島根大学考古学研究会　1979年

13．注７書

14．注８書

15．注９書

16．山本　清「出雲国における方形墳と前方後方墳について」（『山陰古墳文化の研究』1971年所収）で集成された方形墳に近時明らかになったものを加えた。

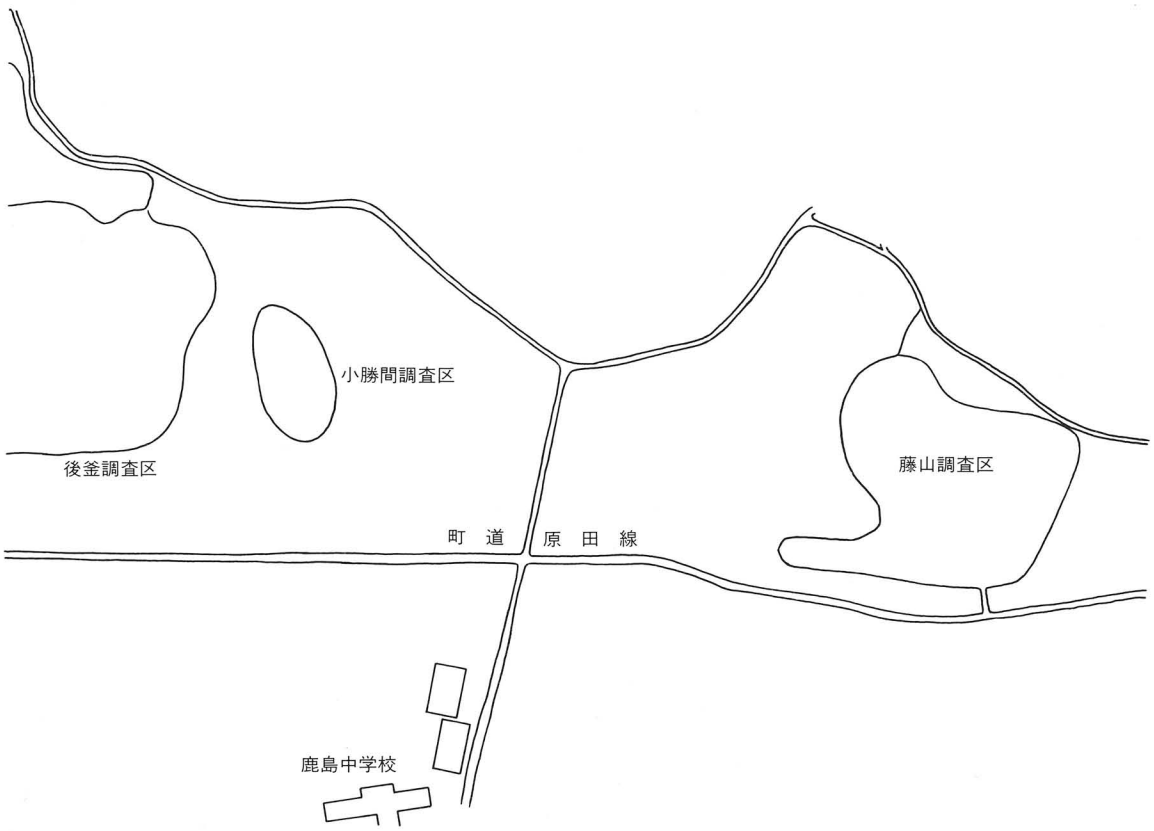
17．島根大学考古学研究会測量調査。数値については同会の御教示をえた。

18．注10書

19．注12書

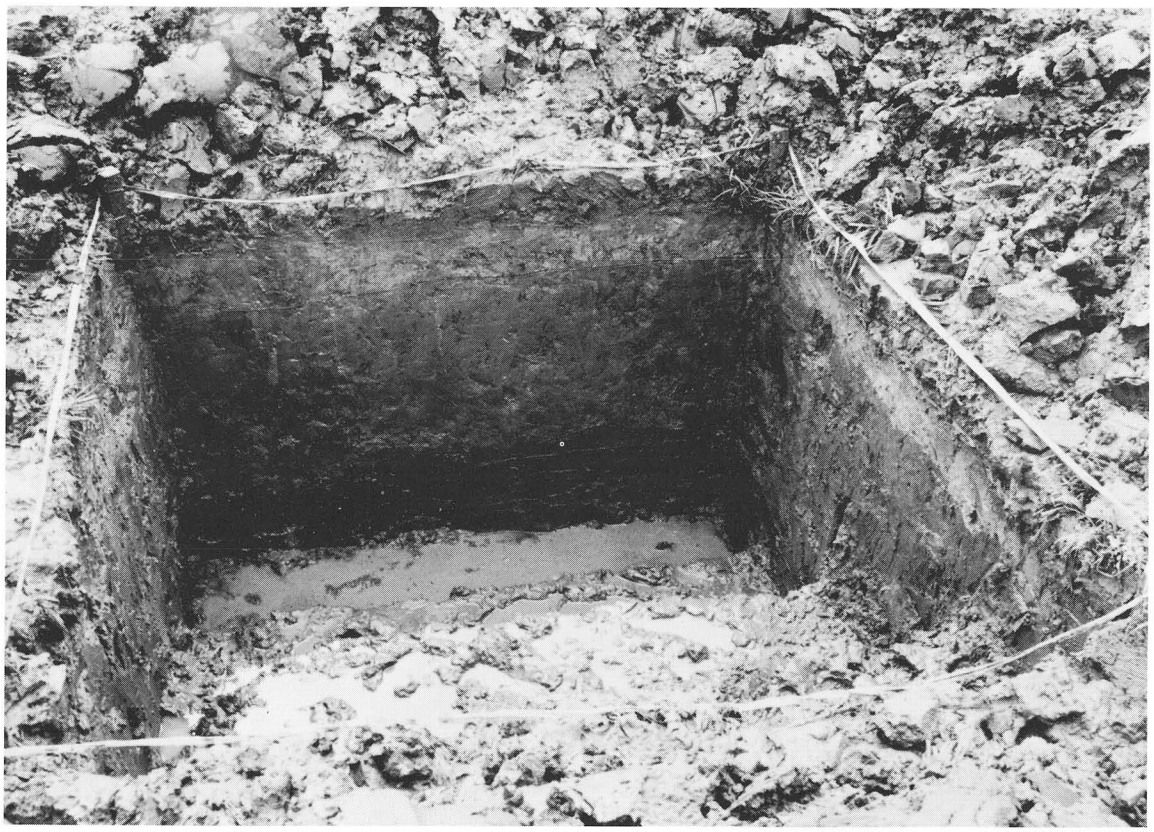
図　　版

名分湯戸遺跡群航空写真



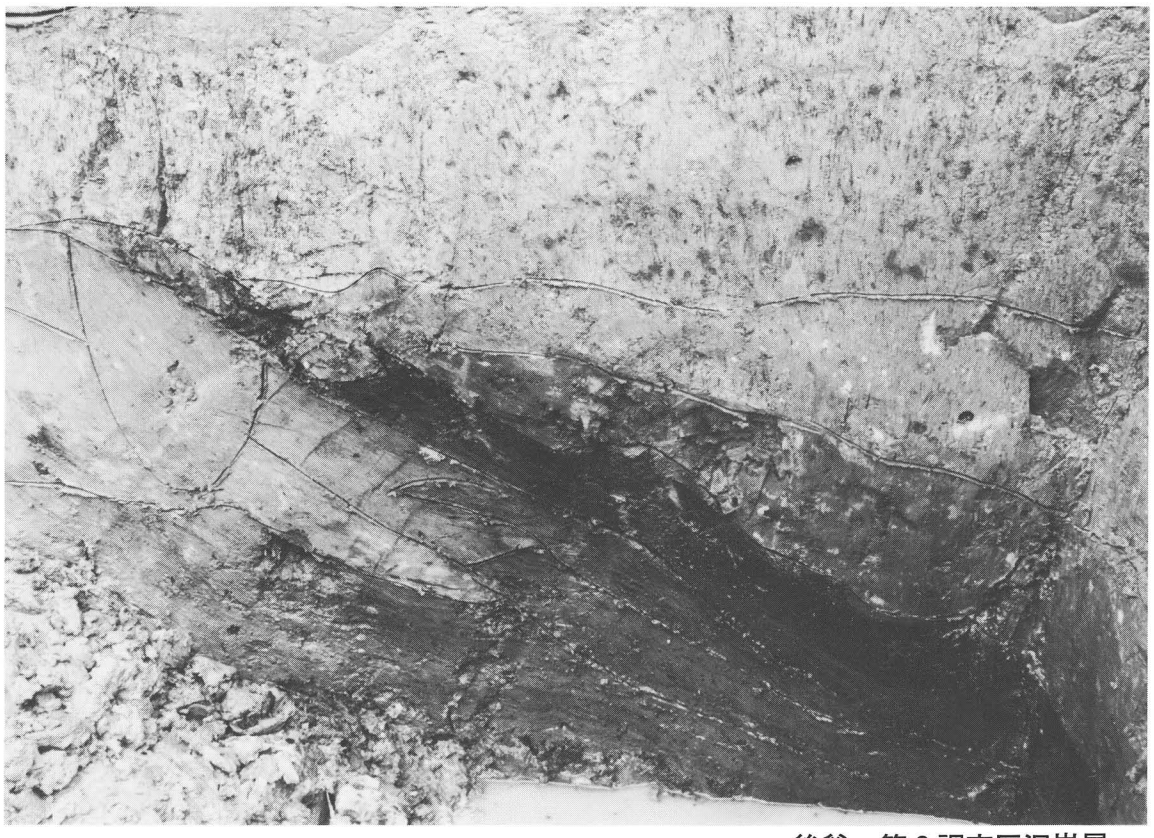
図版 2

後釜調査区遠景



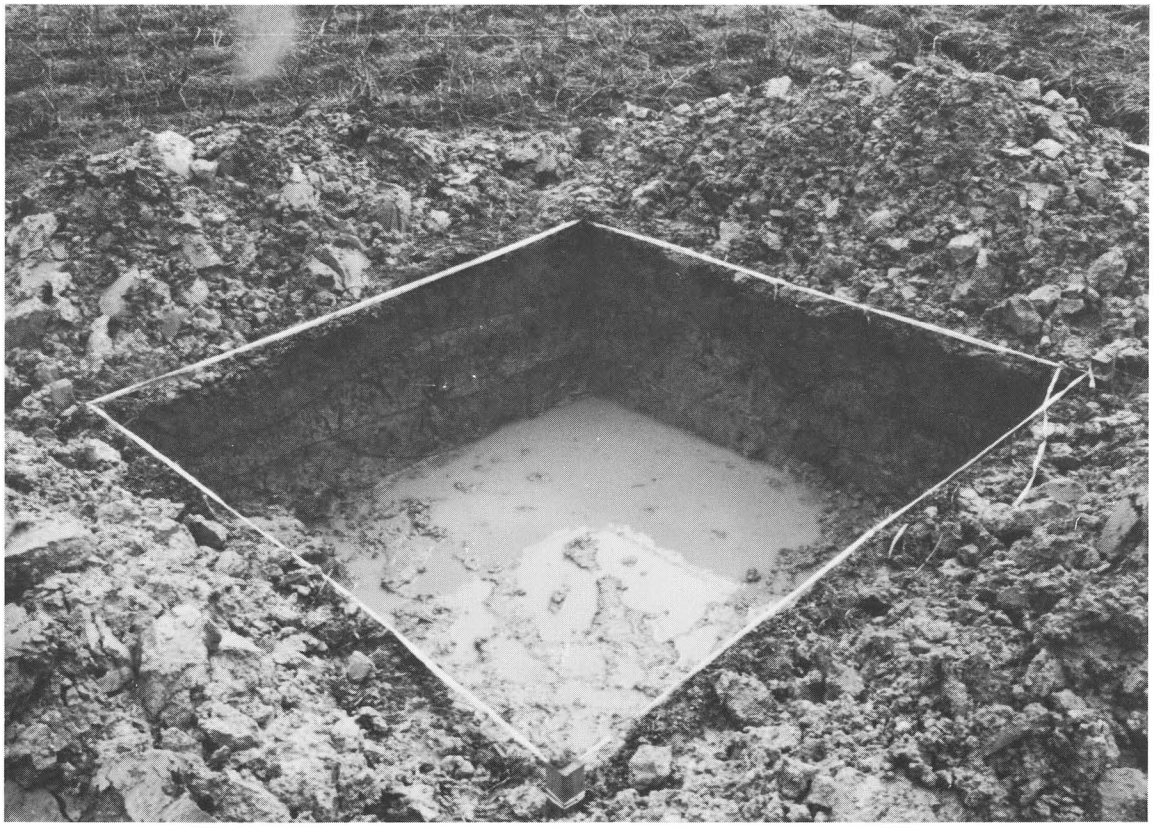
後釜・第1調査区

後釜・第 3 調査区



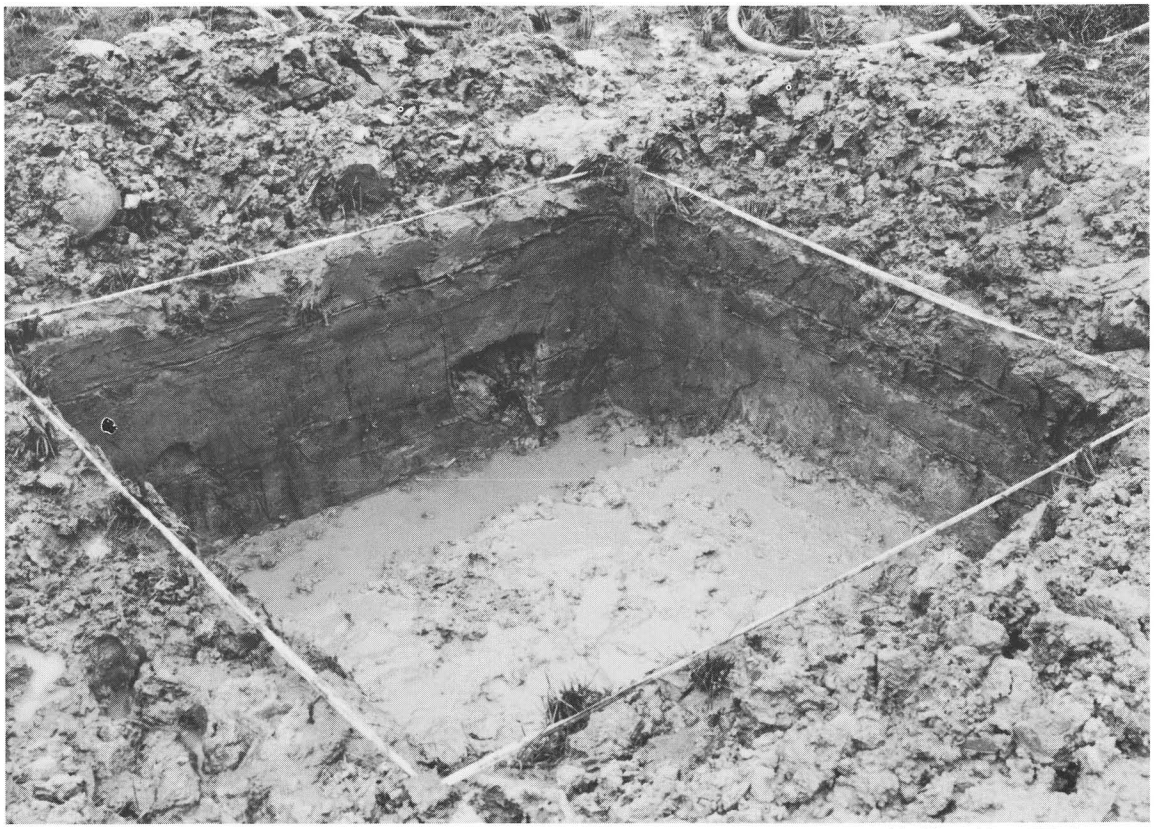
後釜・第 3 調査区泥炭層

図版 4

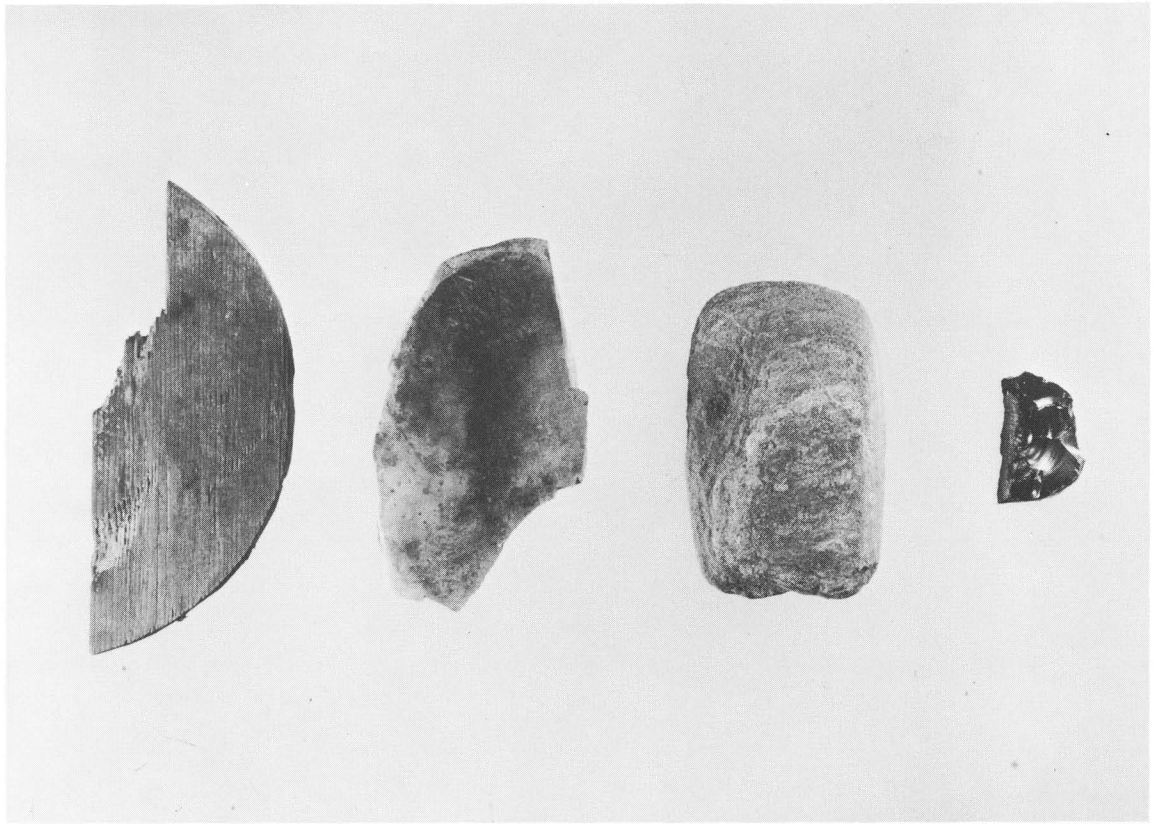


後釜・第 4 調査区

後釜・第 5 調査区



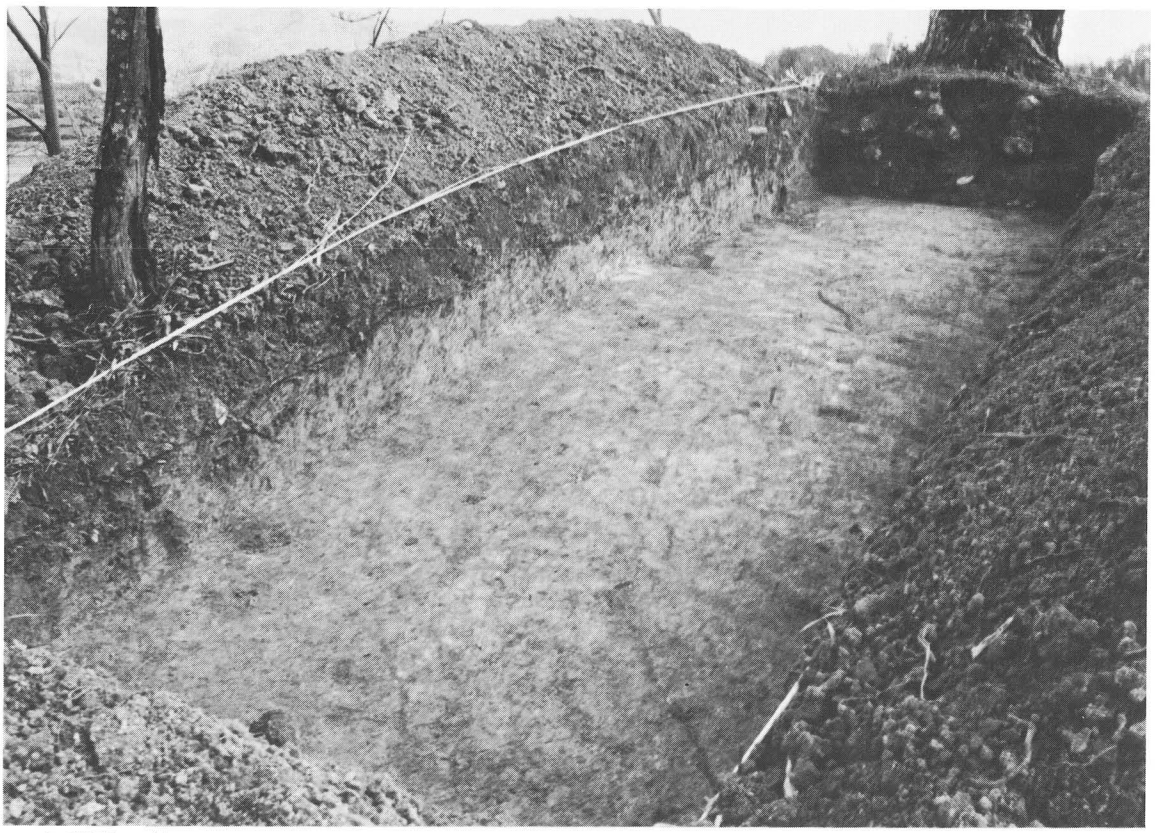
後釜・第 6 調査区



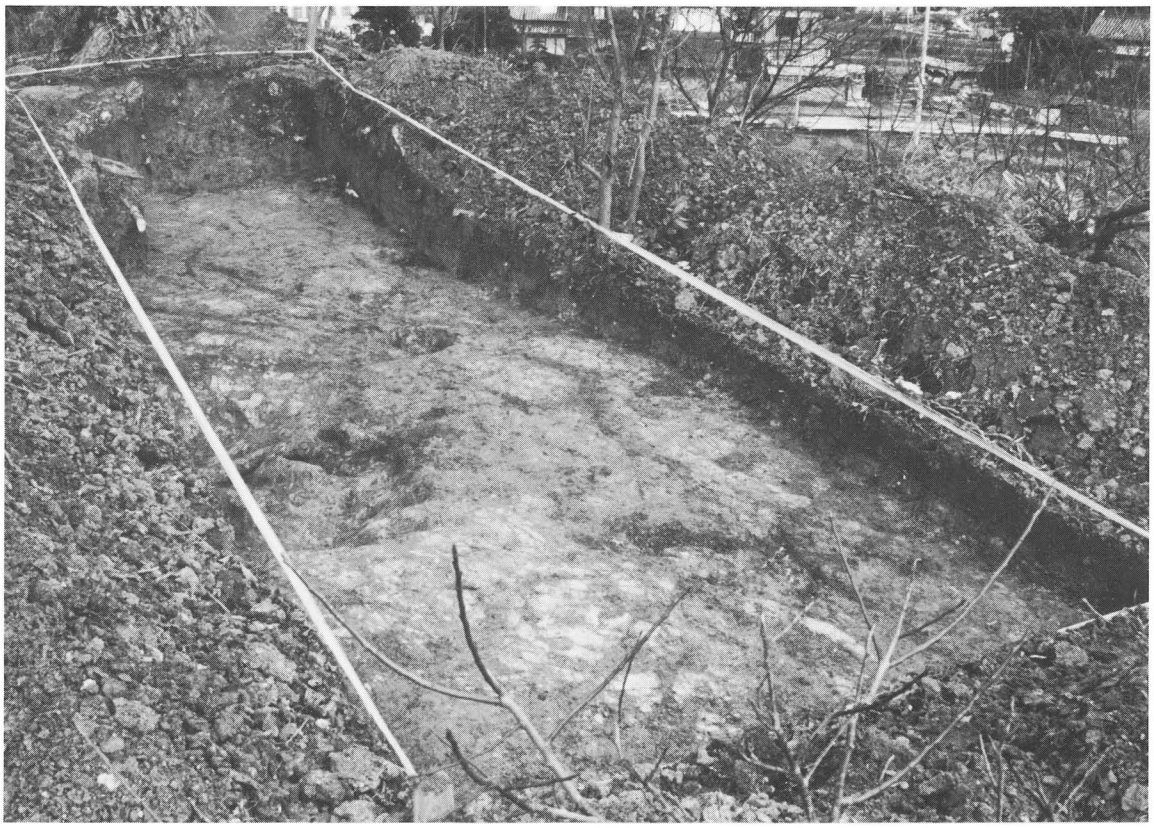
後釜・出土遺物

図 版 6

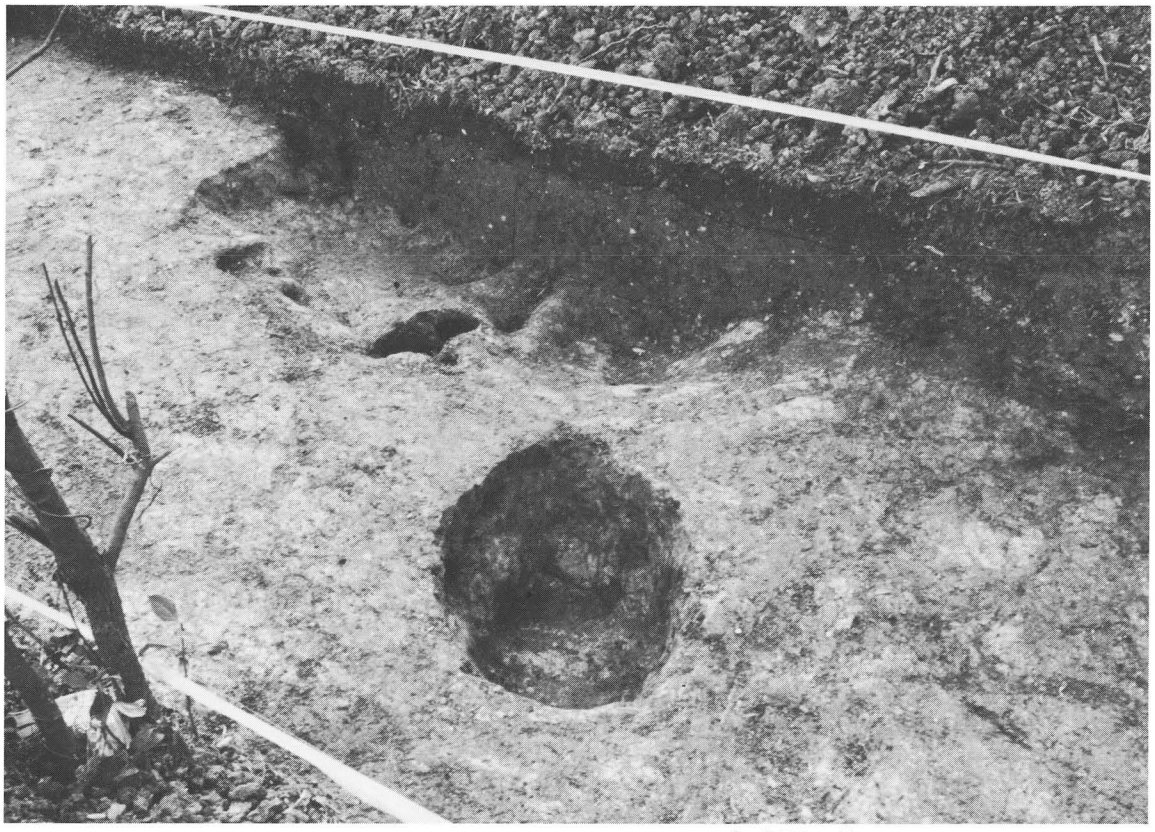
小勝間調査区遠景



小勝間・第１調査区

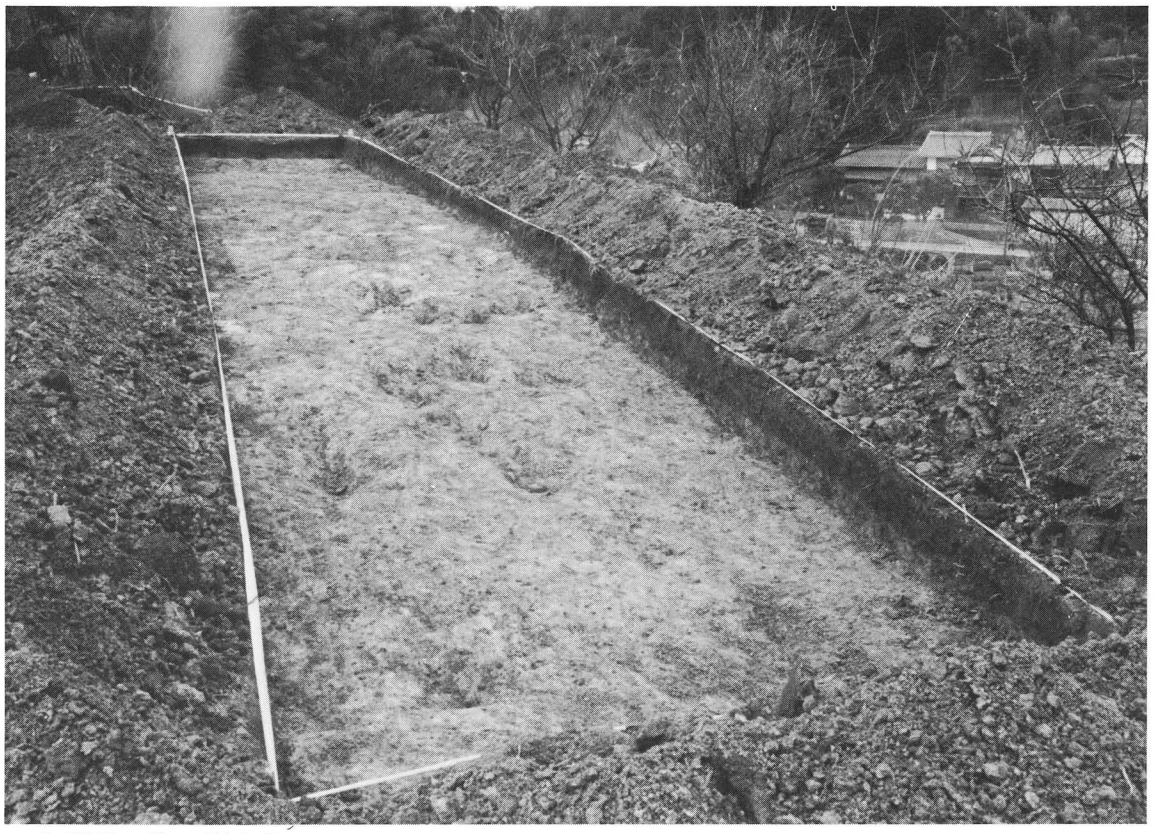


小勝間・第２調査区



小勝間・第２調査区土坑１・２

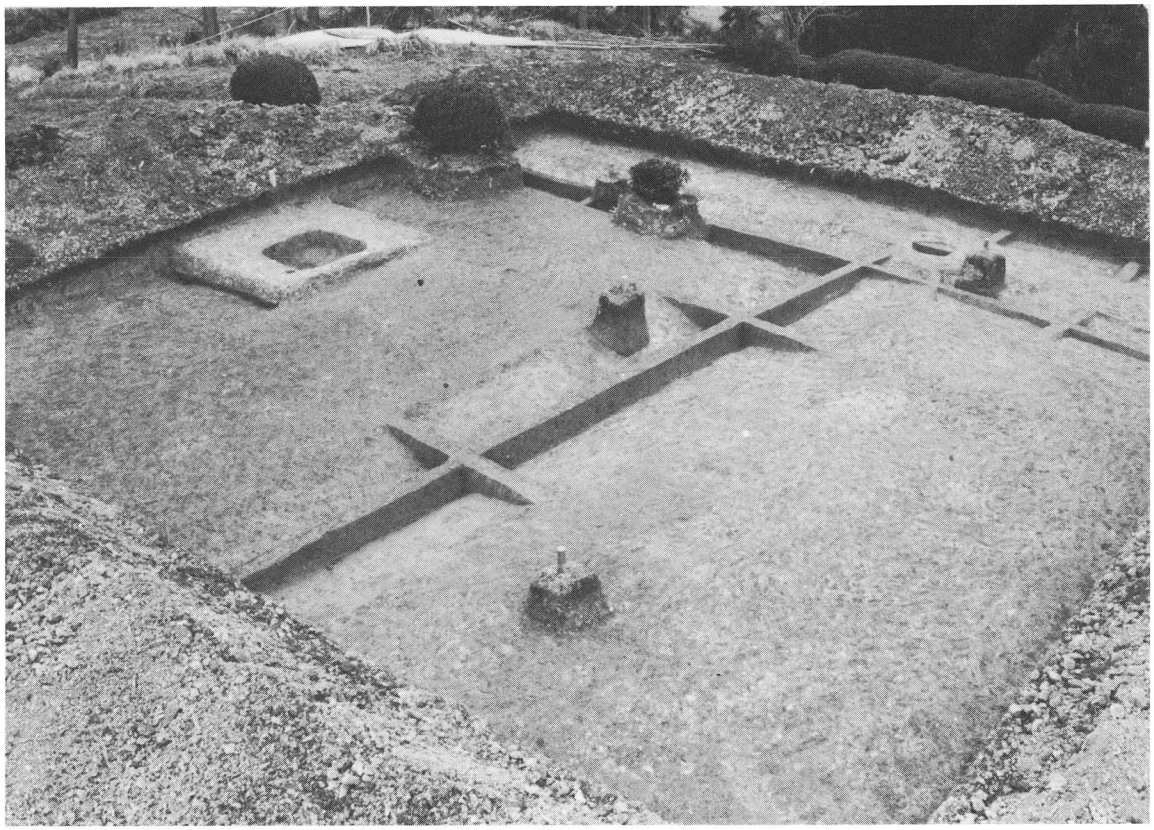
図版 8



小勝間・第 3 調査区

小勝間・第 4 調査区土坑 3

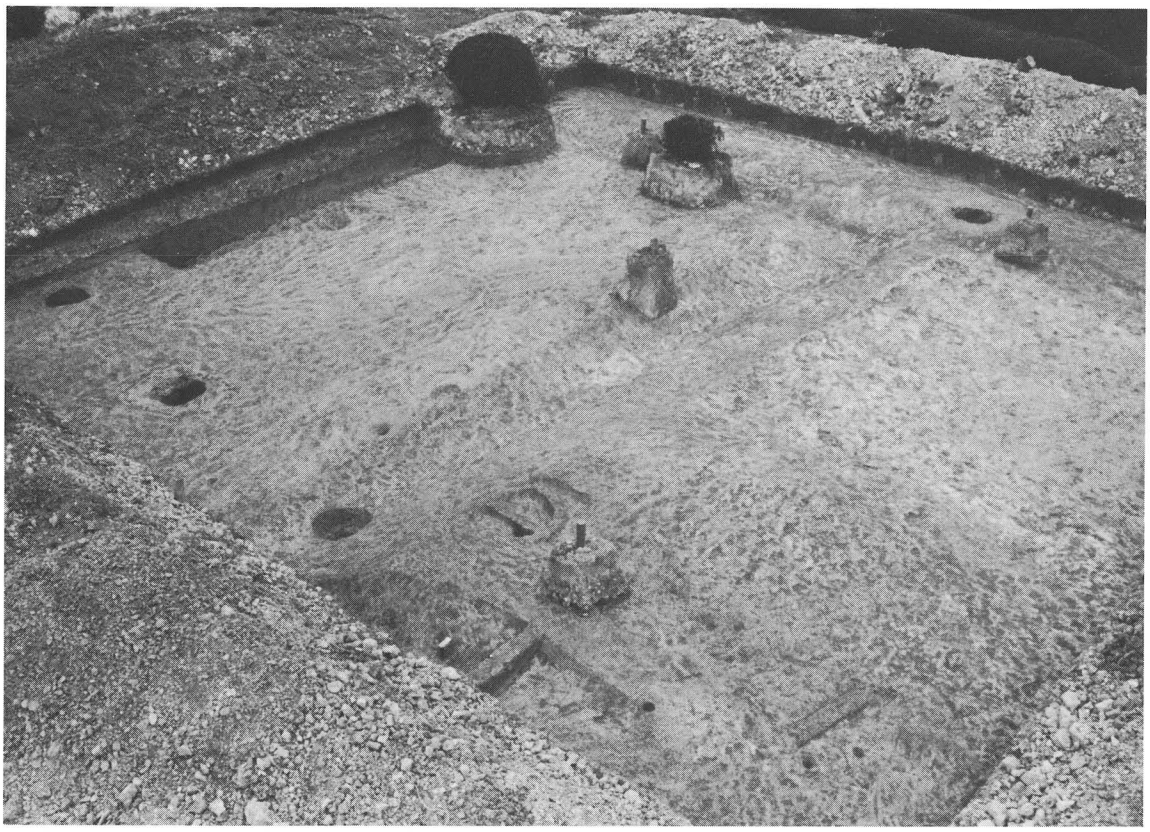
藤山調査区遠景（東から）



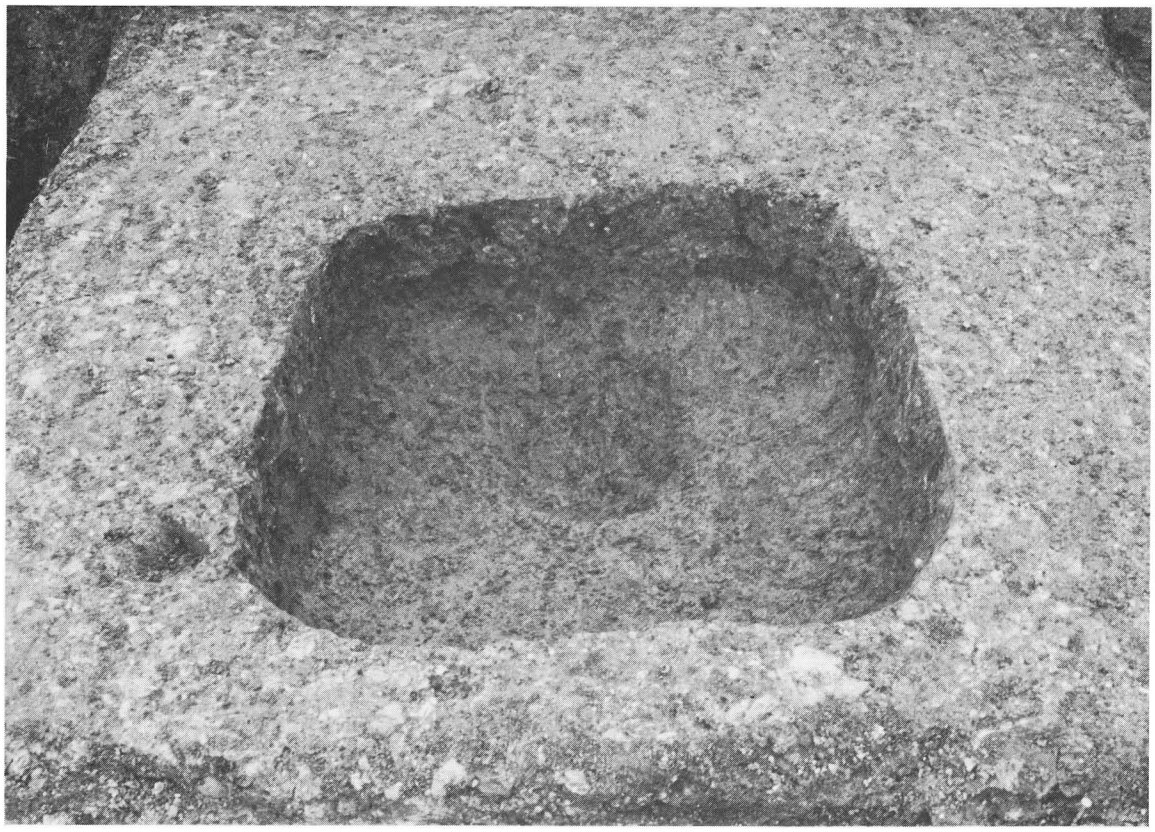
藤山・盛土上面（南東から）

図 版 10

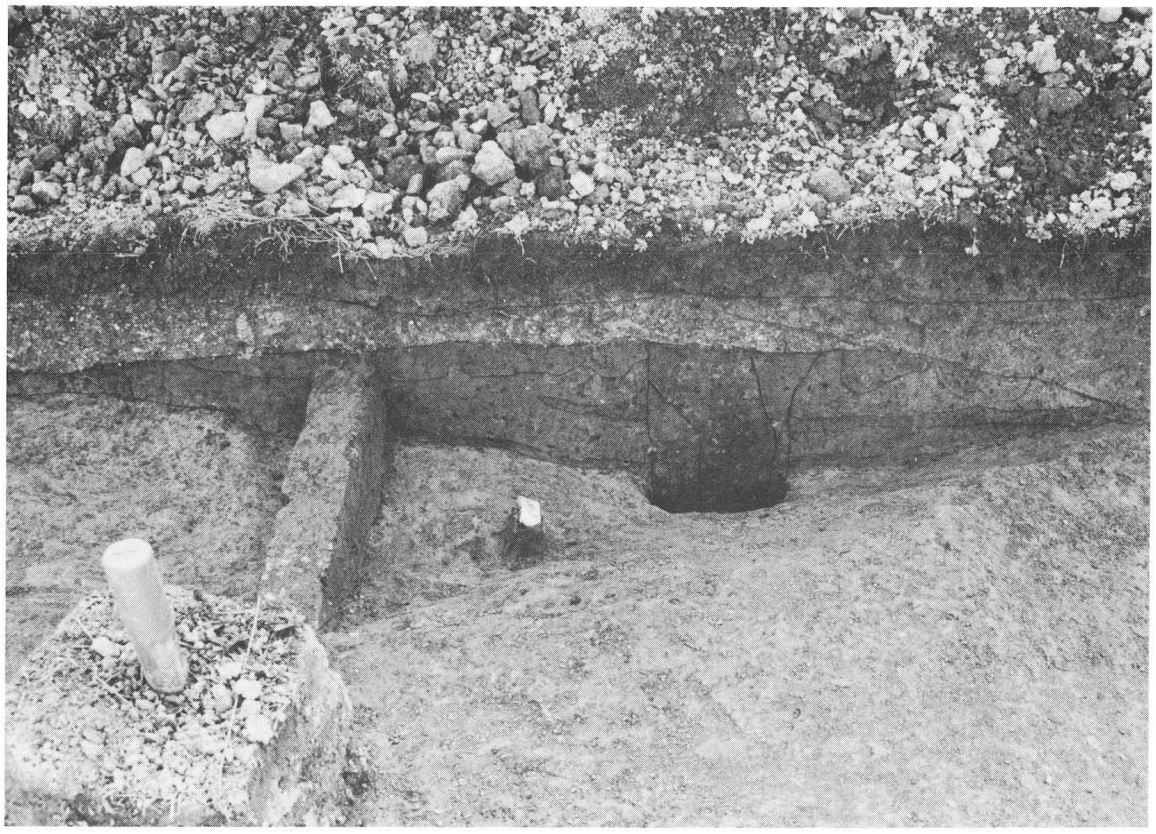
藤山・旧表土上面



藤山・調査終了時

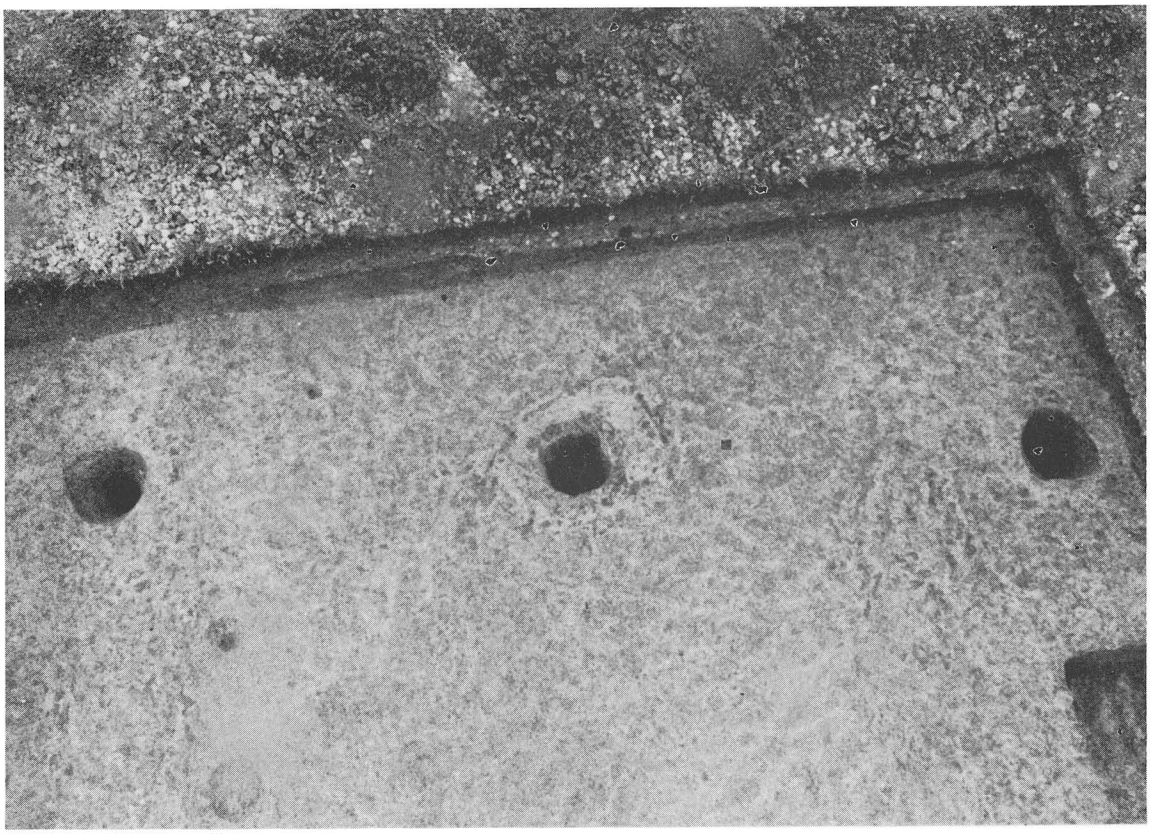


藤山・土坑1

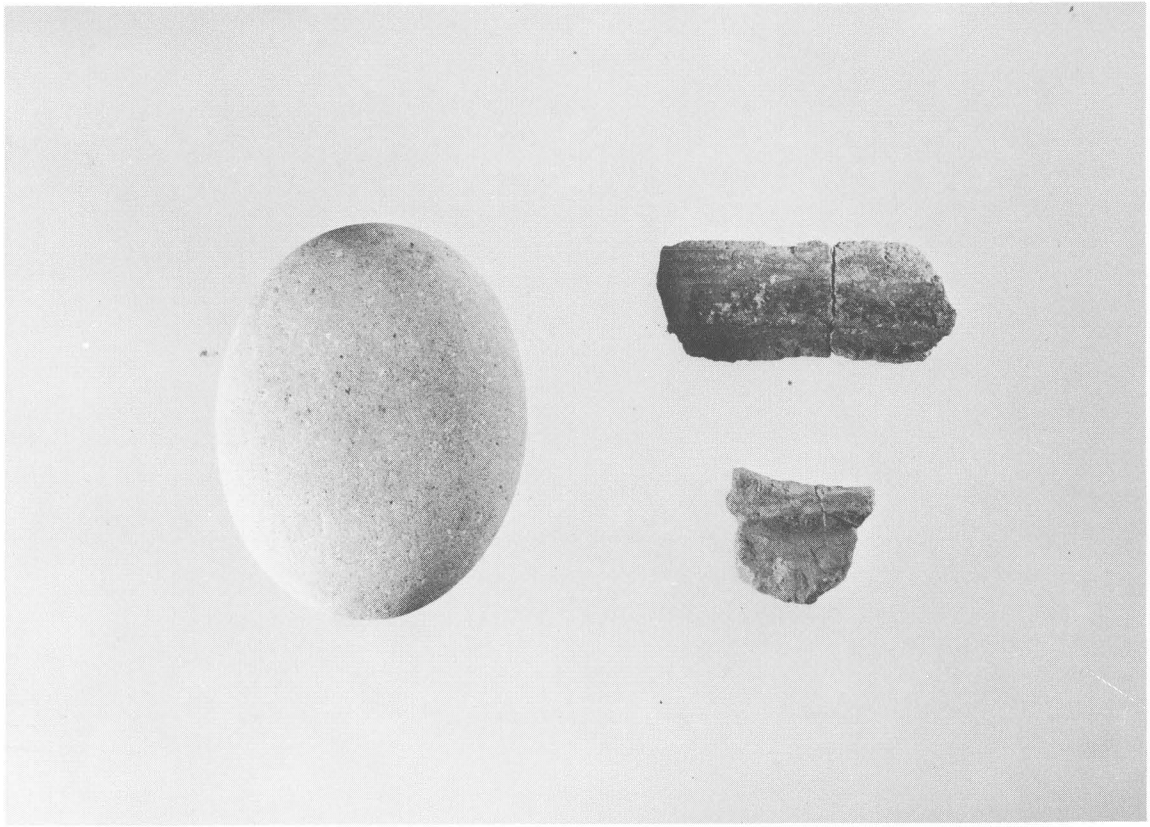


藤山・土坑4・5

図 版 12



藤山・掘立柱建物



藤山・出土遺物

講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書2
名分湯戸遺跡群
1986年3月

発行　鹿島町教育委員会
島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷640－1
印刷　渡部印刷株式会社
松江市中原町192